Copyright © 2012 NTT DATA INTRAMART CORPORATION

intra-mart e Builder for Accel Platform セットアップガイド

目次

- 改訂情報
- はじめに
  - 本書の目的
  - 対象読者
  - セットアップの流れ
- e Builderのインストールとデバッグサーバの構築
  - e Builder のインストール
  - e Builder 起動後の設定
  - デバッグサーバの構築
- e Builder のアップデート
  - 概要
  - バージョンの確認方法
  - 更新サイトからアップデート
  - アーカイブからアップデート
  - [補足] JDKの設定について
  - [補足] 最新版の e Builder にアップデート後、以前のバージョンのワークスペースをそのまま利用する場合の注意点
- プロジェクトの変換
  - 概要
  - コンバート
- e Builder のアンインストール
  - 概要
  - e Builder のアンインストール

改訂情報

変更年月日	変更内容
2012-10-01	初版
2012-11-30	第２版　下記を追加しました ・セットアップガイドの目次に「ローカルリポジトリの設定」と「htmlファイルのエンコーディング設定」を追加 ・ライセンス登録のメニューに「e Builder起動時のウィザードからのライセンス登録方法」を追加
2013-04-01	第３版　下記を追加・変更しました ・セットアップガイドの目次に「*e Builder のアップデート*」を追加しました。 ・「*開発環境用の デバッグサーバ を e Builder に登録*」項をデバッグサーバを利用するよう修正しました。
2013-07-01	第４版　下記を追加・変更しました ・「*デバッグサーバの構築*」項で構築手順の内容を改善しました。
2013-10-01	第５版　下記を追加・変更しました ・2013 Summer 版より、利用できるJava 開発環境(JDK)にJDK7のみとなり、「*Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定*」ページを追加し、「*デバッグサーバの構築*」および「*e Builder のアップデート*」ページで追記・修正しました。 ・「*e Builder のアップデート*」項で業務スケルトンのバージョン確認方法を追記しました。 ・「*デバッグサーバの構築*」項で構築手順の「e Builder にデバッグサーバを登録」の内容を改善しました。
2014-06-09	第６版　改訂情報のリンク切れを修正しました。
2014-08-01	第７版　「*デバッグサーバの構築*」項でライセンスに関する記述を修正しました。
2015-08-01	第８版　「*e Builder のアップデート*」項で 2015 Summer 版にバージョンをあげた場合のスクリプト開発の API 補完機能についての補足を追記しました。

変更年月日	変更内容
2015-12-01	第９版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のインストール*」項でJDKの表記に対する編集を行いました。 ■ 「*Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定*」項でJDKの表記に対する編集を行いました。 ■ 「*デバッグサーバの構築*」項で 2015 Winter がサポートする resin のバージョンにリンクを変更しました。 ■ 「*デバッグサーバの構築*」項で結合テスト環境作成時の注意書きを追加しました。 ■ 「*e Builder のアップデート*」項で 2015 Winter での Eclipse のバージョン変更に伴い、記述を変更しました。 ■ 「*e Builder のアップデート*」項でアップデートの手順を 2015 Summer までを対象に記述しました。 ■ 「*e Builder のアップデート*」項でライブラリの更新に関する記述を変更しました。 ■ 「*プロジェクトの変換*」項を追加しました。
2016-01-13	第１０版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のアップデート*」項でアーカイブ取得先のリンクを変更しました。 ■ 「*e Builder のインストール*」項でツール取得先のリンクを変更しました。
2016-04-01	第１１版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のアップデート*」項で更新時における注意を記述しました。 ■ 「*プロジェクトの変換*」項で実施手順の前提条件に対して追記を行いました。 ■ 「*e Builder のインストール*」項でSVNを利用する際におけるプラグインのインストールの補足を行いました。
2016-12-01	第１２版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のインストール*」項でJavaのセットアップに関する記述を変更しました。 ■ 「*e Builder のインストール*」項でe Builder のインストールに関する記述を変更しました。 ■ 「*e Builder のインストール*」項でSVNを利用する際におけるプラグインのインストールの補足を削除しました。 ■ 「*Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定*」項でJDKの表記に対する編集を行いました。 ■ 「*デバッグサーバの構築*」項でデバッグサーバの起動に関するJavaの記述を変更しました。 ■ 「*e Builder のアップデート*」項で 2016 Winter での Eclipse のバージョン変更に伴い、記述を変更しました。
2017-04-01	第１３版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のインストール*」項のe Builderの入手方法の説明を修正しました。
2019-02-28	第１４版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のインストール*」項に e Builder のメモリ設定に関するコラムを追記しました。 ■ 「*エディタのフォントとエンコーディングの設定*」項にフォントに関する設定を追記しました。 ■ 「*デバッグサーバの構築*」項のサーバ実行時メモリの初期値を変更しました。 ■ 「*Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定*」項で JDK のバージョンに関する変更を行いました。 ■ 「*e Builder のアップデート*」項で 2018 Winter での Eclipse のバージョン変更に伴い、記述を変更しました。
2021-08-01	第１５版 下記を追加・変更しました ■ 「*e Builder のアップデート*」項の「更新サイトからアップデート」に関する記述を変更しました。
2023-04-01	第１６版 下記を追加・変更しました ■ 「*デバッグサーバの構築*」 - 「*デバッグサーバのテナント環境の構築*」の記述を変更しました。

変更年月日	変更内容
2023-10-01	第１７版 下記を追加・変更しました ▪ 基盤となる Eclipse のバージョン変更に伴い、各手順の画像の差し替えを行いました。 ▪ 「*Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定*」の記述を変更しました。 ▪ 「*プロパティファイルの関連付け設定*」項を追加しました。 ▪ 「*e Builder のアップデート*」項の「更新サイトからアップデート」に関する記述を変更しました。 ▪ 「*e Builder のアップデート*」項のデバッグサーバの起動に利用する JRE についての補足を削除しました。

はじめに

本書の目的

intra-mart e Builder for Accel Platform は、 intra-mart Accel Platform 上で動作するアプリケーションを開発するための開発支援ツールです。
intra-mart e Builder for Accel Platform セットアップガイドでは、 モジュール・プロジェクト を導入し開発環境を整えるまでの手順を説明します。

対象読者

次の利用者を対象としています。

- intra-mart Accel Platform 上で動作するアプリケーションの開発者

セットアップの流れ

本書では以下のような流れで開発環境のセットアップを行います。

- *e Builder のインストール*
- *e Builder 起動後の設定*
- *デバッグサーバの構築*

上記を行うと、開発環境の構築が完了します。

e Builderのインストールとデバッグサーバの構築

e Builder のインストール

項目
- 概要
- Java のセットアップ
- e Builder のインストール
- e Builder の起動とセットアップ

概要

- 本書では intra-mart e Builder for Accel Platform （以降では e Builder と表記）でのインストール手順を説明します。
  はじめに、開発に利用する Java Development Kit をセットアップしてください。
  次に、e Builder をセットアップします。
- e Builder は、統合開発環境の Eclipse がベースとなった製品です。
  e Builder には、intra-mart Accel Platform で提供している開発フレームワークに必要となるまたは便利なプラグインがすべて含まれています。

Java のセットアップ

- Java Development Kit の最新版をインストールし、Java コマンドが動作するように環境変数 PATH を設定してください。

> **コラム**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2023 Autumn 版より、e Builder の起動に必要な JRE は 17 に設定されました。
> ※ eBuilder8.ini にて、-Dosgi.requiredJavaVersion に 17 が設定されています。

> **コラム**
>
> e Builder を利用する際に、環境変数 PATH で JDK を指定できない場合は、e Builder をインストールしたフォルダにある eBuilder8.ini で以下のように -vm オプションを設定してください。
> ※ -vm オプションは、-vmargs オプションより上に追加してください。
> （例）
> ――――――――――――――
> （省略）
> -vm
> <Javaのインストールパス>/bin/javaw.exe
> -vmargs
> （省略）
> ――――――――――――――

e Builder のインストール

- 「 eBuilder8-win32.win32.x86_64.zip 」を任意のフォルダに展開してください。

> **コラム**
>
> 最新版は、「 プロダクトファイルダウンロード 」から入手できます。
> ※ ダウンロードには製品のライセンスが必要です。

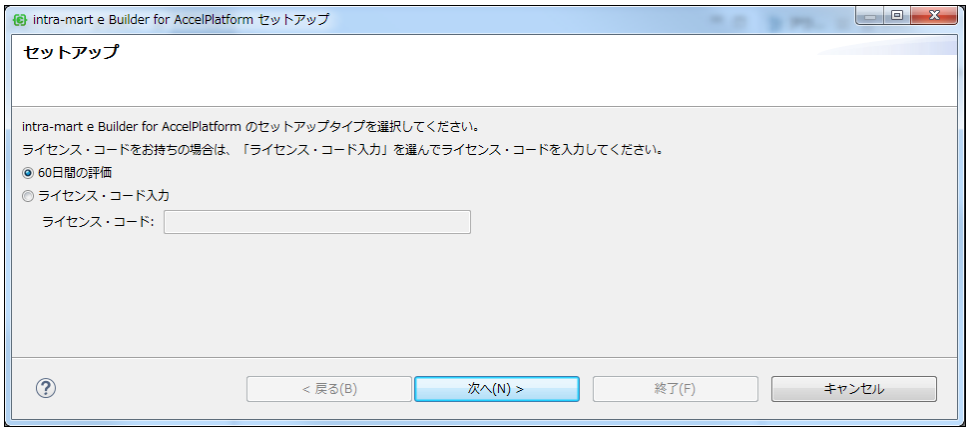
e Builder の起動とセットアップ

- 展開したフォルダ内の eBuilder8.exe を実行します。

> **コラム**
>
> 起動できない場合、Java のセットアップが正しく完了できていない可能性があります。
> 環境変数の PATH 等、再度設定内容を確認してください。

> **コラム**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2018 Winter 版より、メモリサイズのデフォルト値が変更されています。
> メモリサイズは、eBuilder8.ini にて以下の様に設定されていますので、ご利用の環境に合わせて変更してください。
> ――――――――――――――
> （省略）
> -Xms512m
> -Xmx4096m
> （省略）
> ――――――――――――――

- e Builder の初回起動時に下図のような「セットアップウィザード」画面が表示されます。
  このウィザード画面で試用版ライセンスを利用するか製品版ライセンスを利用するか選択してください。
  ライセンスは初回起動時でなくても登録できます。ライセンスをお持ちでない方は評価版を選択してください。評価版は 60 日間有効です。
  また、この画面で「キャンセル」をクリックすると自動的に e Builder が終了します。



e Builder 起動後の設定

Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定

項目

- 概要
- 各種設定
  - ワークスペース設定 [Java]-[インストール済みのJRE]
  - ワークスペース設定 [Java]-[コンパイラー]-[準拠レベル]
  - プロジェクト設定 [Javaのビルド・パス]-[ライブラリ]
  - プロジェクト設定 [Javaコンパイラー]-[JDK準拠]

概要

本項では intra-mart e Builder for Accel Platform で利用する JDK の設定について記述します。
このページでは、プロジェクト作成時に初期設定されている JDK のバージョンを 17 から変更する方法について説明します。

注意

intra-mart e Builder for Accel Platform 2023 Autumn (8.0.34) より JDK 17 をサポートしております。
JDK 17 以外を利用した開発を行うお客様は、intra-mart e Builder for Accel Platform 2023 Autumn (8.0.34) をインストール後、JDK 17 用に設定されている箇所を、利用したい JDK バージョンに変更してご利用ください。

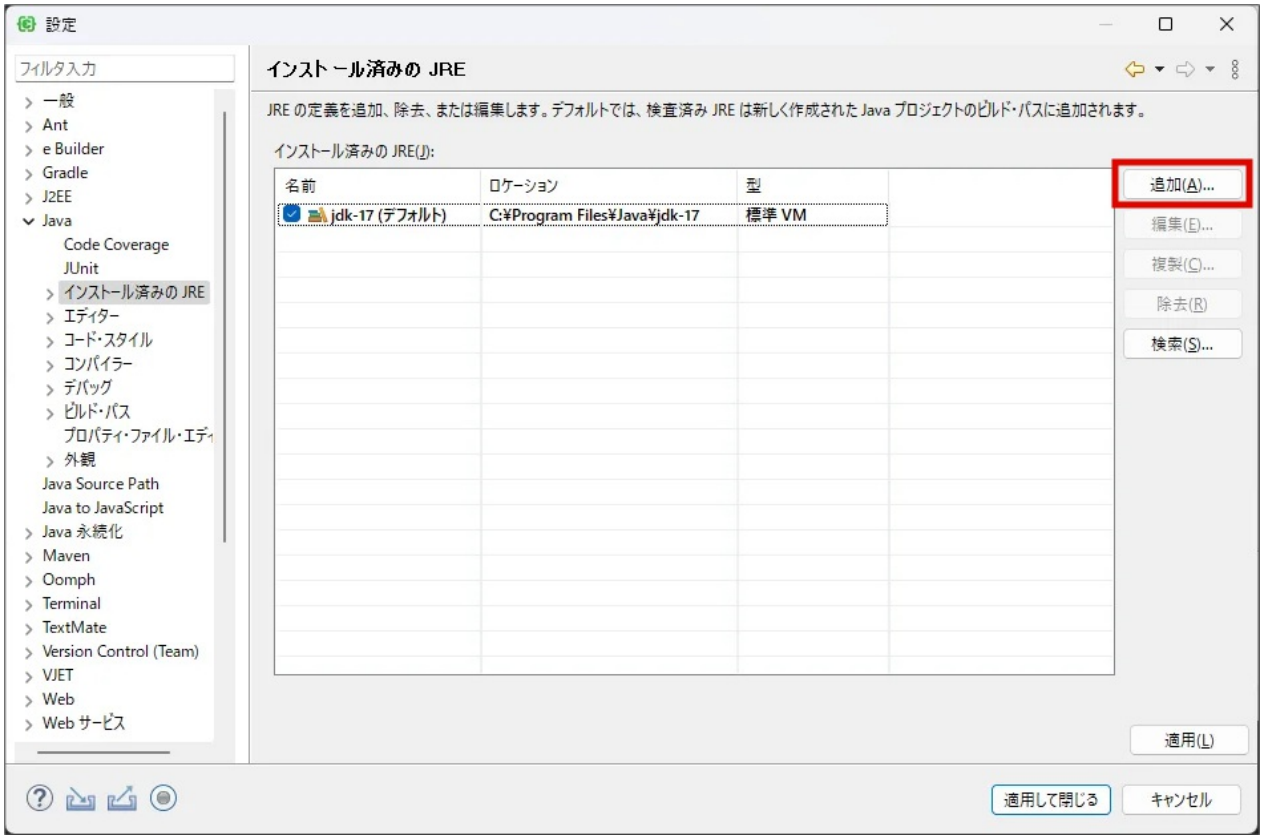
コラム

以下では、インストール後 JDK 11 を利用するように設定を書き換える方法について説明します。

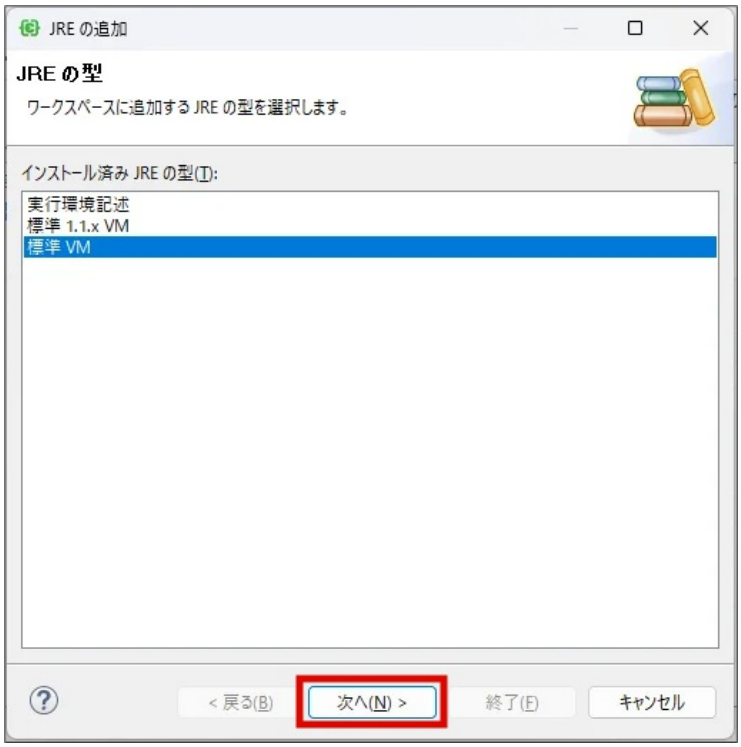
各種設定

ワークスペース設定 [Java]-[インストール済みのJRE]

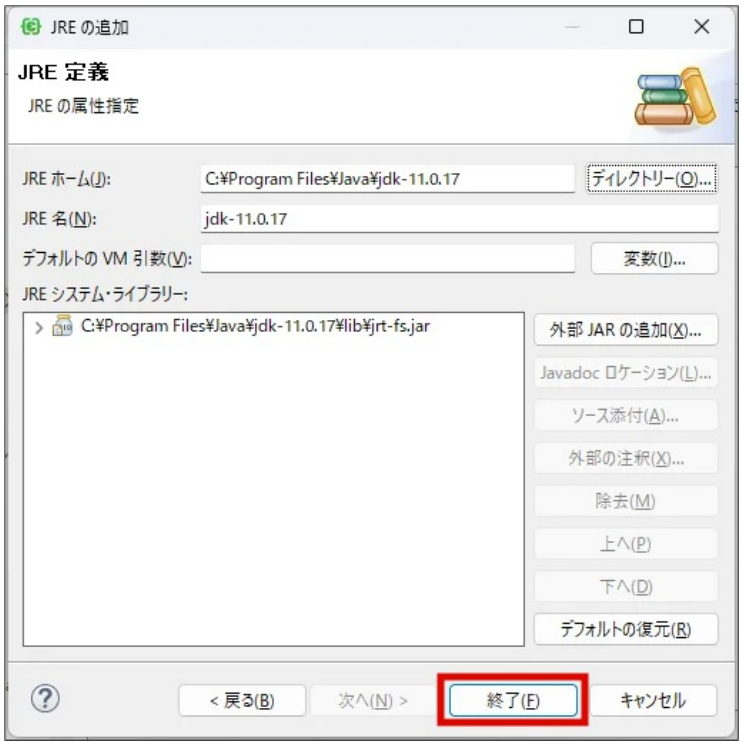
- メニューバー [ウィンドウ]-[設定] を開き、メニュー [Java]-[インストール済みのJRE] を開き、[追加]ボタンを押下します。



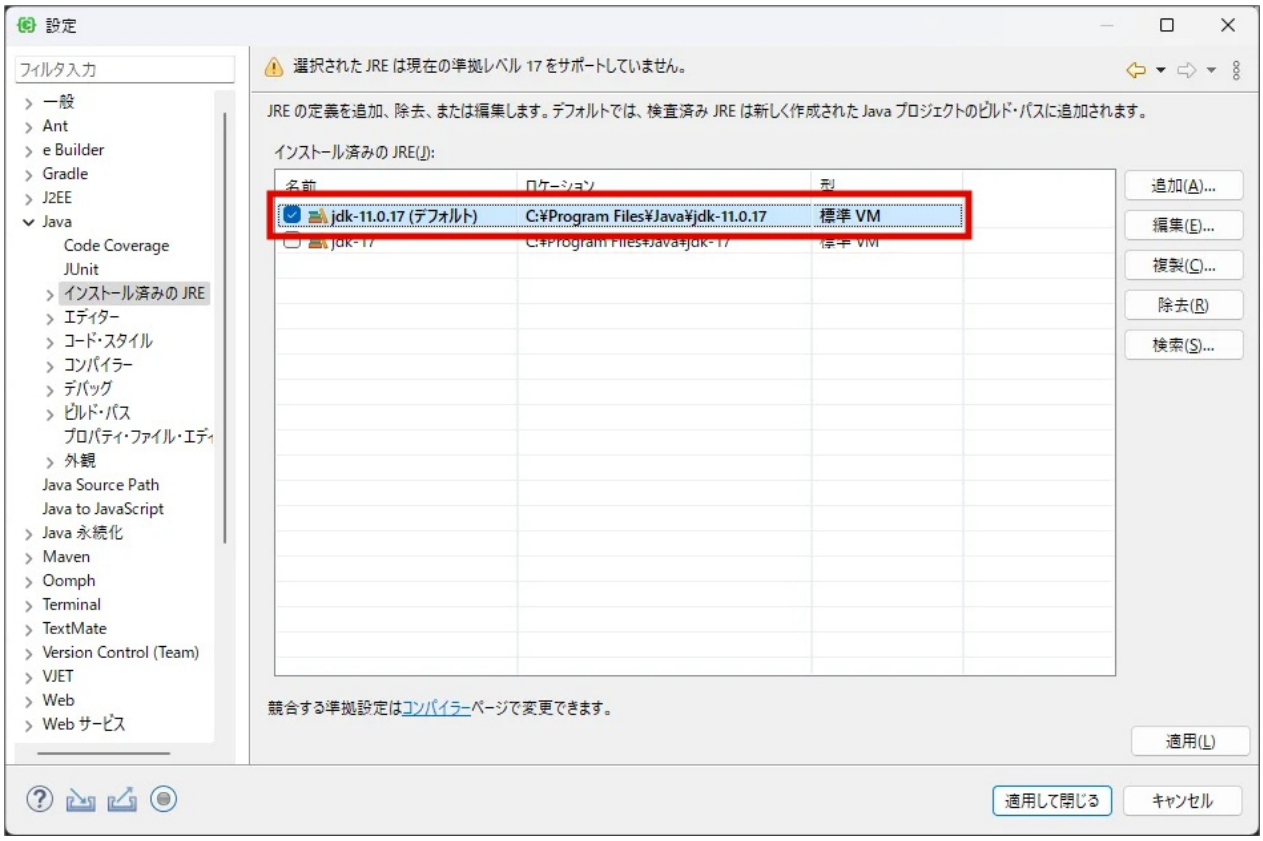
- [次へ]ボタンを押下します。



- 下記イメージを参考に、[JREホーム] に JDK 11 を設定・追加して[終了]ボタンを押下します。



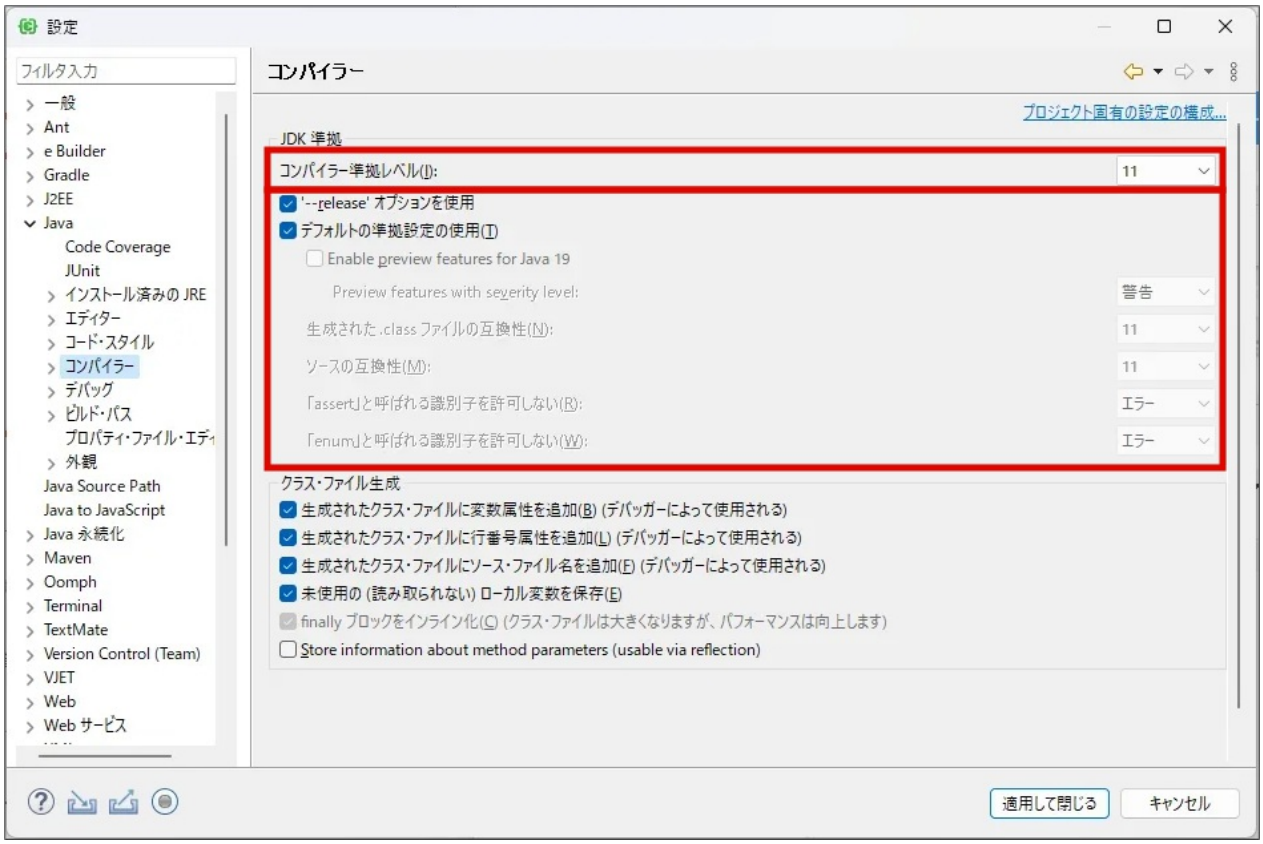
- チェックボックスを押下して、追加した JDK 11 をデフォルトに設定します。



> **コラム**
>
> ご利用になる JDK のバージョンがインストールされていない場合、インストールしてください。
> 使用する JDK のバージョンは、最新のアップデートバージョンをご利用することをお奨めします。

ワークスペース設定 [Java]-[コンパイラー]-[準拠レベル]

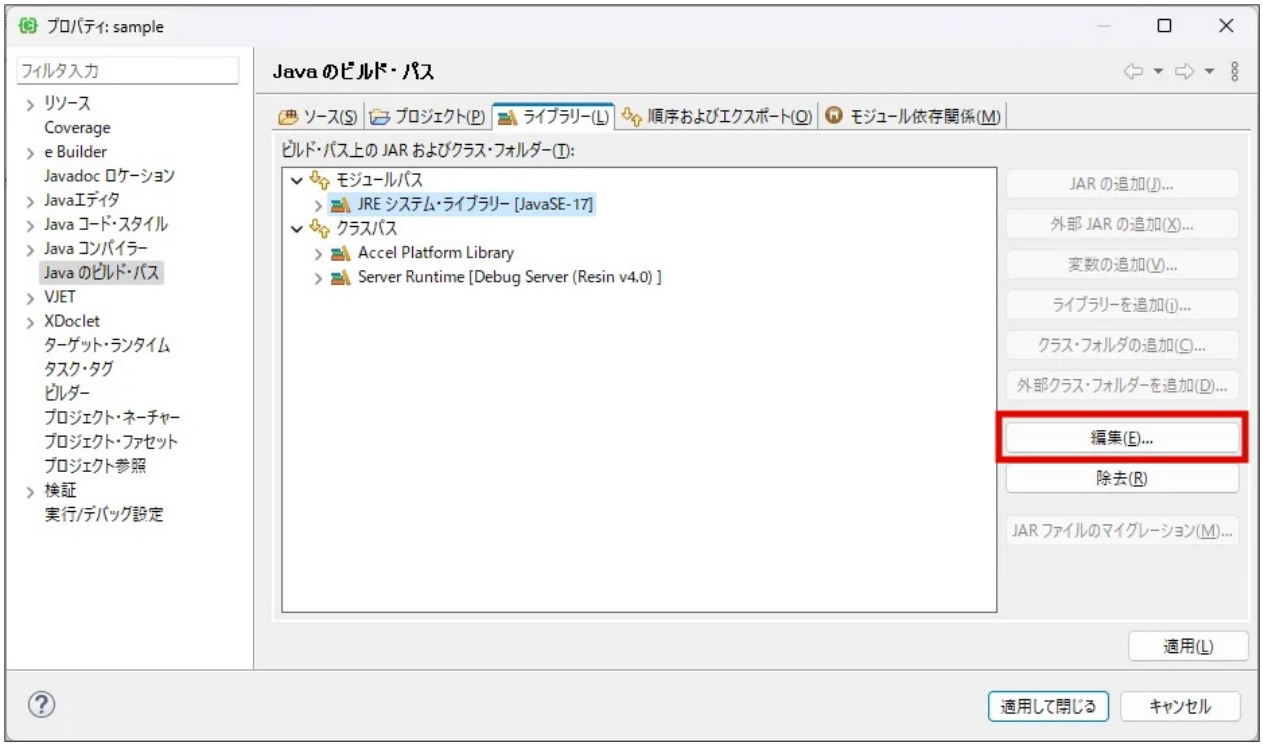
- メニューバー [ウィンドウ]-[設定] を開き、メニュー [Java]-[コンパイラー] を開きます。
  設定項目 [JDK準拠]-[コンパイラー準拠レベル] を「11」に設定してください。
  設定項目 [JDK準拠]-[デフォルトの準拠設定の使用] を選択して「有効」に設定してください。



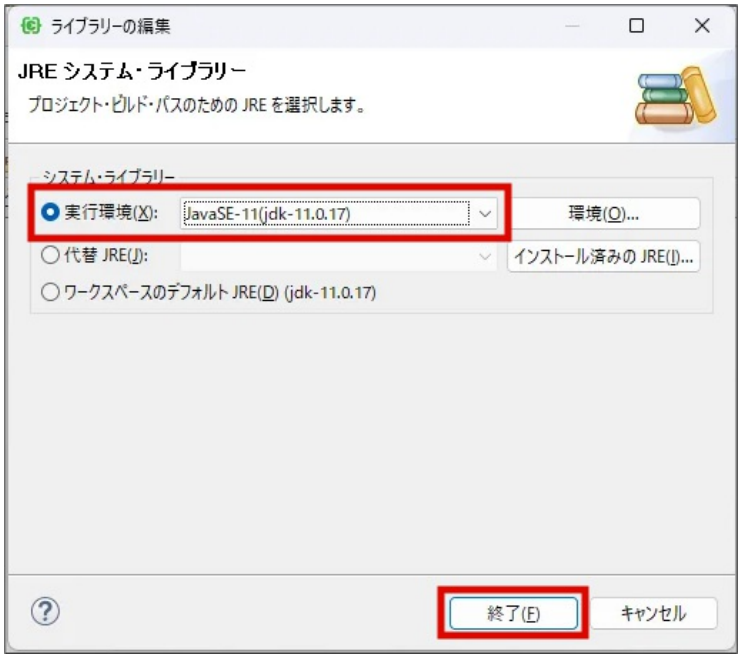
プロジェクト設定 [Javaのビルド・パス]-[ライブラリ]

- プロジェクトを選択し、右クリックメニュー [プロパティ] を開き、メニュー [Javaのビルド・パス] を開きます。

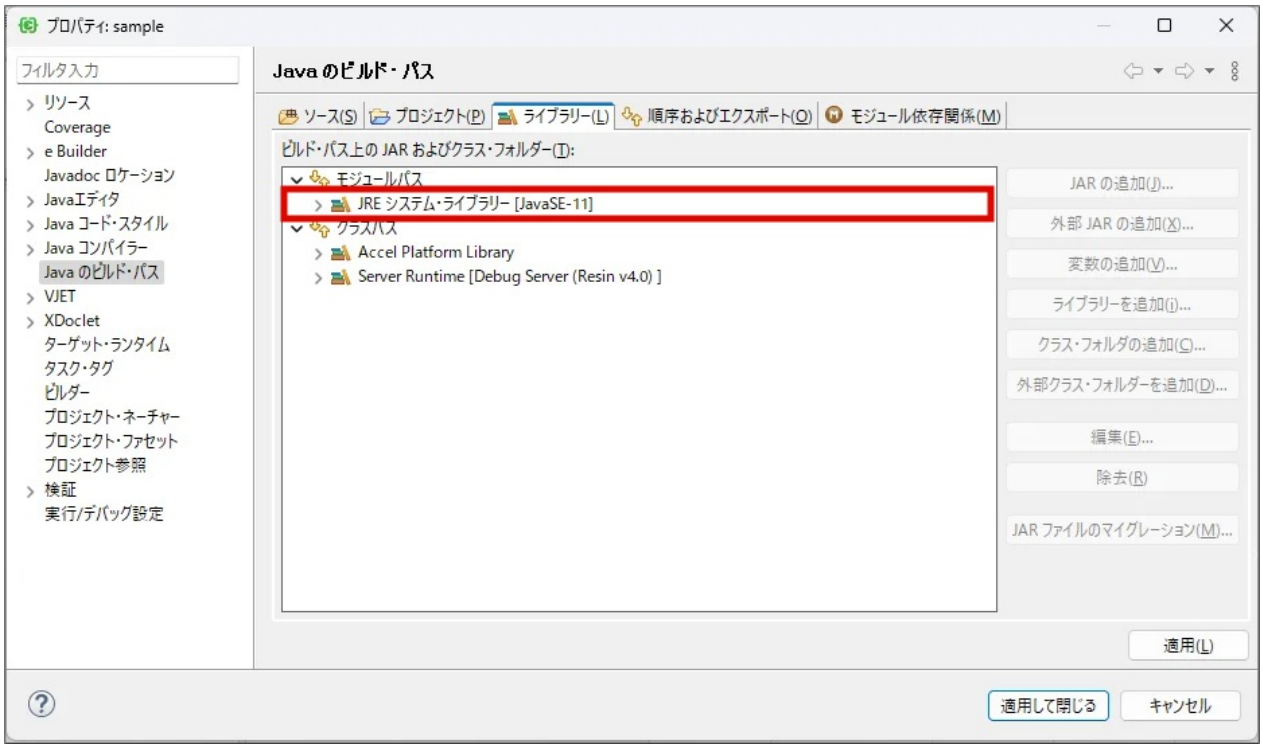
設定タブ [ライブラリー] を開き、[JRE システム・ライブラリー] に JDK 17 が設定されている場合は、[編集]ボタンを押下します。



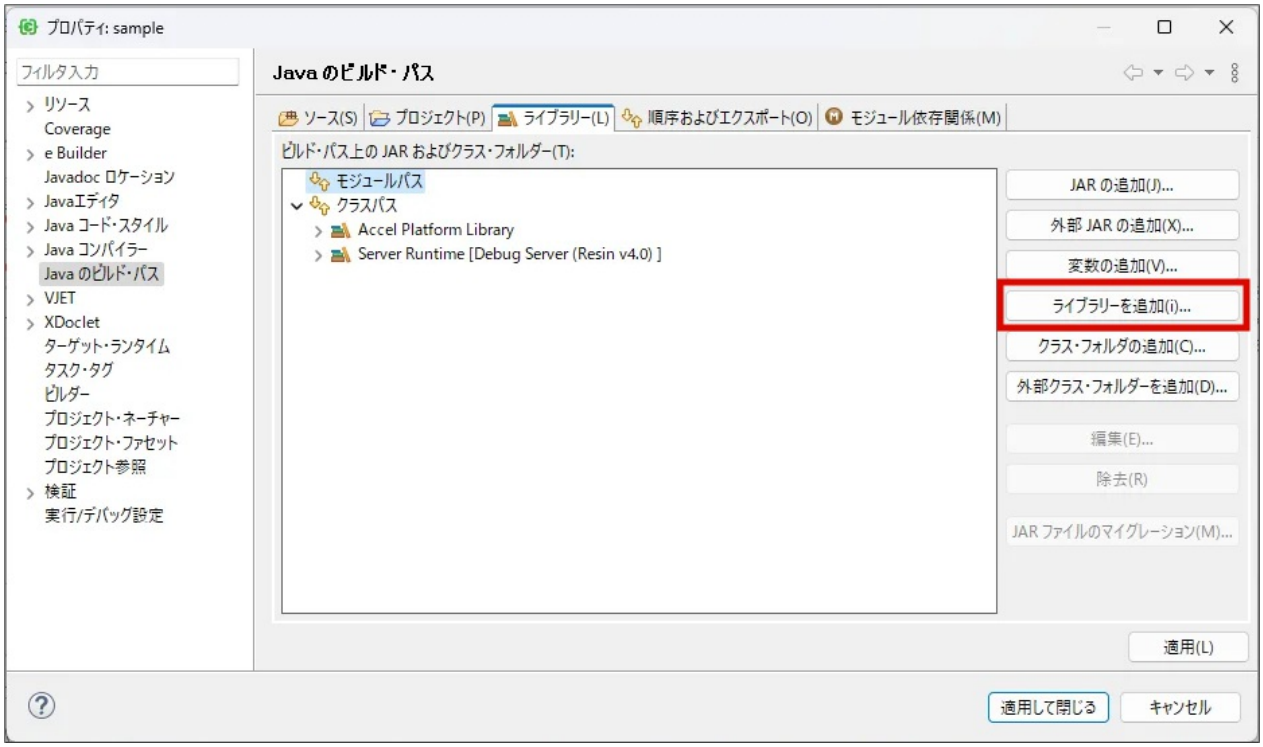
- [実行環境] に JDK 11 を設定し、[終了]ボタンを押下します。



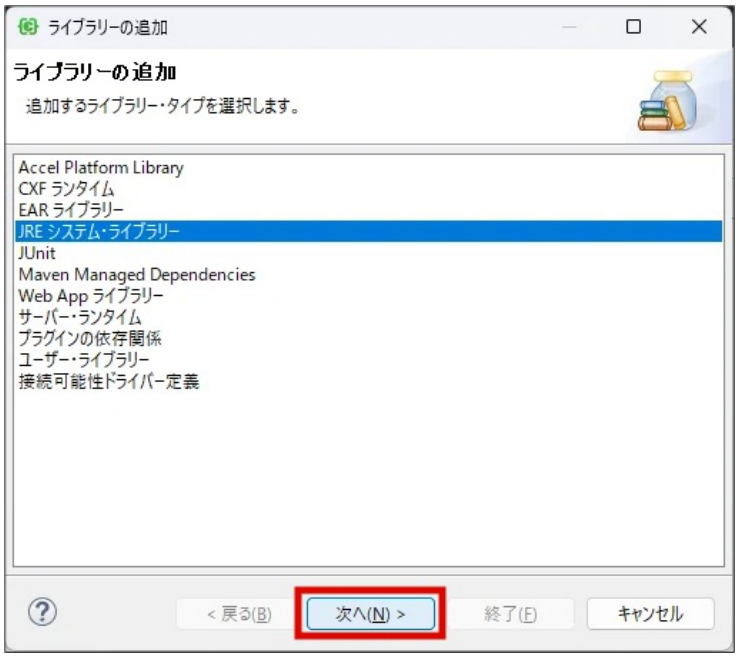
- [JRE システム・ライブラリー] に JDK 11 が設定されたことを確認します。



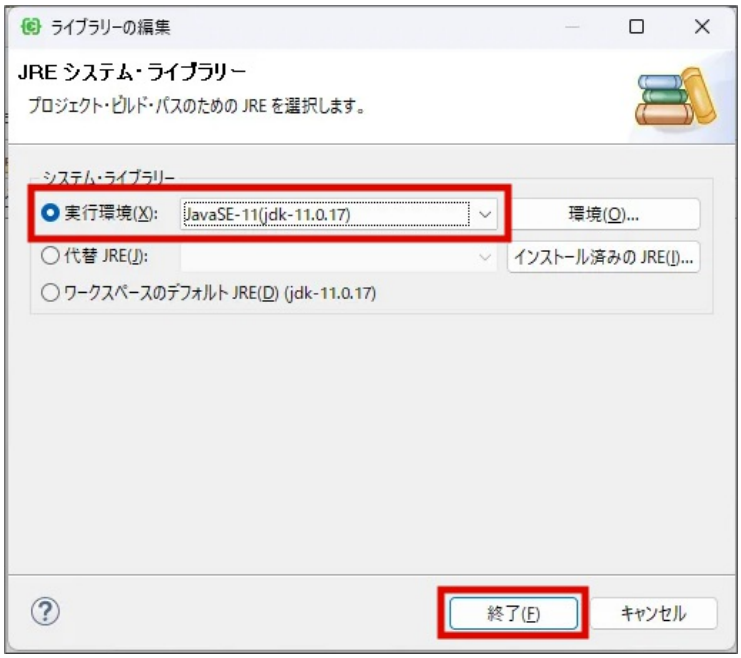
- [JRE システム・ライブラリー] が設定されていない場合は、[ライブラリーを追加]ボタンを押下します。



- [JRE システム・ライブラリー] を選択し、[次へ]ボタンを押下します。

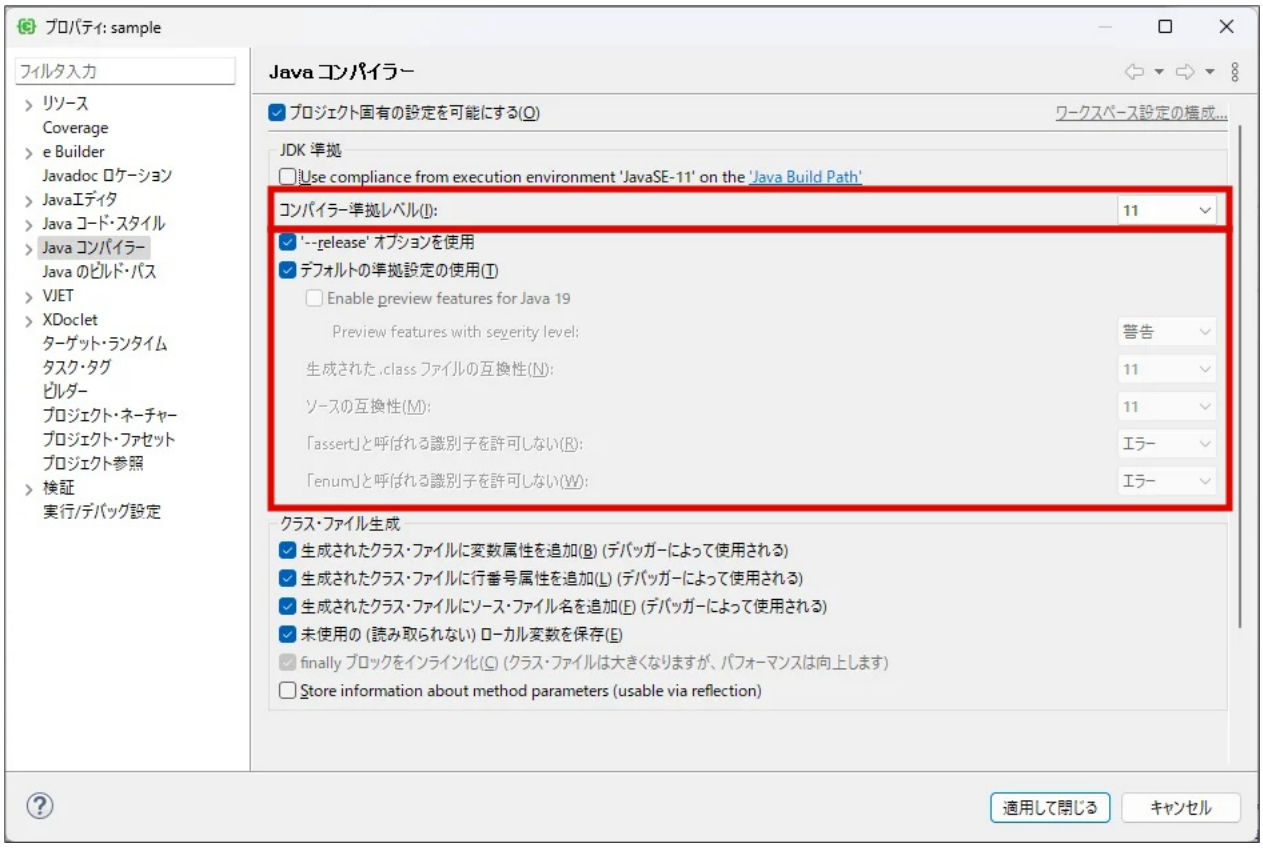


- [実行環境] に JDK 11 を設定し、[終了]ボタンを押下します。



プロジェクト設定 [Javaコンパイラー]-[JDK準拠]

- プロジェクトを選択し、右クリックメニュー [プロパティ] を開き、メニュー [Javaのビルド・パス] を開きます。
  設定項目 [JDK準拠]-[コンパイラー準拠レベル] を「11」に設定してください。
  設定項目 [JDK準拠]-[デフォルトの準拠設定の使用] を選択して「有効」に設定してください。



> **コラム**
>
> モジュール・プロジェクトを新規に作成した場合は、[プロジェクト固有の設定を可能にする] オプションが「有効」に設定されています。
> ワークスペースの設定を共通利用したい場合は、[プロジェクト固有の設定を可能にする] オプションを「無効」に設定してください。

Mavenローカルリポジトリの設定

項目

- 概要
- 説明

概要

- 本項では e Builder のプラグインとして同梱されているMavenローカルリポジトリについて説明します。
  Maven を利用した開発を行わない場合、下記に示す「Download repository index updates on startup」オプションを無効にすることをお奨めします。

> **コラム**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Winter (8.0.12) 以降では標準でこの設定が OFF に設定されています。

説明

モジュールプロジェクトから imm ファイルをエクスポートする機能は、Mavenプラグインにて実装されています。
モジュールプロジェクトから imm ファイルをエクスポートする際に、Mavenコマンドを実行し、このとき利用する settings.xml と Mavenローカルリポジトリは下記の通りです。

- settings.xml
  - <ワークスペース>/.metadata/.plugins/jp.co.intra_mart.module.developer.maven/.m2/settings.xml ※e Builder起動毎に初期化されます。
- Mavenローカルリポジトリ
  - <e Builderの展開パス>/plugins/jp.co.intra_mart.module.developer.maven_8.0.X.yyyyMMddHHmm/repository

Mavenローカルリポジトリの設定は、Eclipseのプラグインとして提供されている「M2E - Maven Integration for Eclipse」の仕様に沿って作成されています。

現状の設定のままだと、不要なファイルが作成され、上記のプラグインの容量が非常に大きなものとなってしまいます。
それを回避するために、不要なファイルを作成するのを避けるように下記の設定をしてください。

1. メニュー・バーの「ウィンドウ」-「設定」を選択する。
2. 「Maven」ページの「Download repository index updates on startup」のチェックを外す。

エディタのフォントとエンコーディングの設定

項目
- エディタのフォント設定
  - フォントの設定
- HTML ファイルのエンコーディング設定
  - エンコーディングの設定

エディタのフォント設定

- 本項では Java エディタ等のエディタに関するフォント設定について説明します。

  intra-mart e Builder for Accel Platform 2018 Winter 版以降で、e Builder を起動した JDK のバージョンによって、コメントに記載した文字が文字化けしてしまう事象が確認されています。
  Consolas 以外のフォントを利用することで回避可能なことが確認できています。
  文字化けを確認された場合は下記の設定を行ってください。

フォントの設定

- 以下の設定手順にてエディタのフォントを指定します。
  1. メニュー・バーの「ウィンドウ」-「設定」を選択する。
  2. 「一般」-「外観」-「色とフォント」ページで「基本」-「テキストフォント」を選択して編集ボタンをクリックする。
  3. 「Consolas」以外のフォントに変更する。

HTML ファイルのエンコーディング設定

- 本項では HTML ファイルのエンコーディングの設定について説明します。

  intra-mart Accel Platform では、HTML ファイルのエンコーディングとして「UTF-8」を推奨しています。
  HTML ファイルを編集する際、Eclipse には文字コード判別を行う機能がありますが、初期設定では JavaVM オプション「-Dfile.encoding」の設定値になってしまい、UTF-8 以外の文字コードでファイルが作成されたり、UTF-8 以外の文字コードでファイルを読み込まれることがあります。
  そのため、下記設定を行ってください。

  > **コラム**
  >
  > intra-mart e Builder for Accel Platform 2012 Winter 版より、eBuilder8.ini に「-Dfile.encoding=UTF-8」が指定されました。
  > これにより、下記設定は初期設定されています。

エンコーディングの設定

- 以下の設定手順にて HTML ファイルのエンコーディングを指定します。
  1. メニュー・バーの「ウィンドウ」-「設定」を選択する。
  2. 「Web」ページの「HTML Files」を選択して以下の 2 つのエンコーディングを設定します。
     - 「Loading files」のエンコーディングを「ISO 10646/ユニコード(UTF-8)」に変更する。
     - 「Creating files」のエンコーディングを「ISO 10646/ユニコード(UTF-8)」に変更する。

プロパティファイルの関連付け設定

項目
- 概要
- 説明

概要

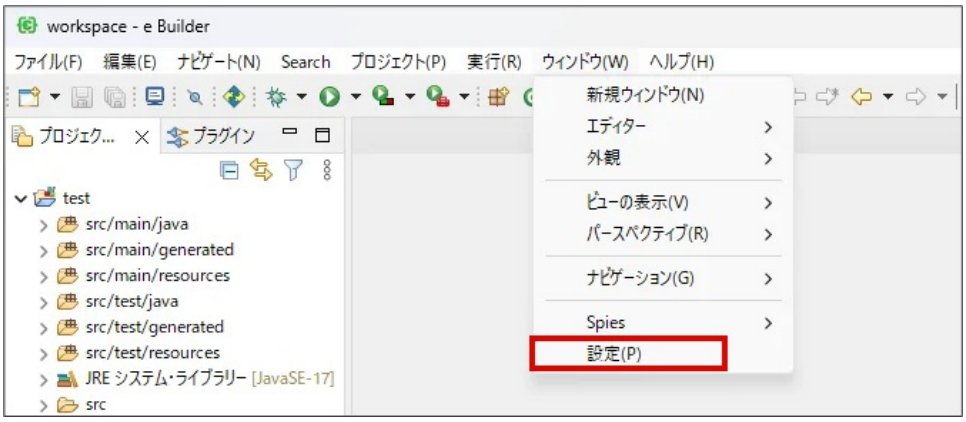
- 本項では プロパティファイルのエディタに関する設定について説明します。

  intra-mart e Builder for Accel Platform 2023 Autumn 版以降では、プロパティファイルを編集するために「Kantan Properties Editor」プラグインが用意されています。

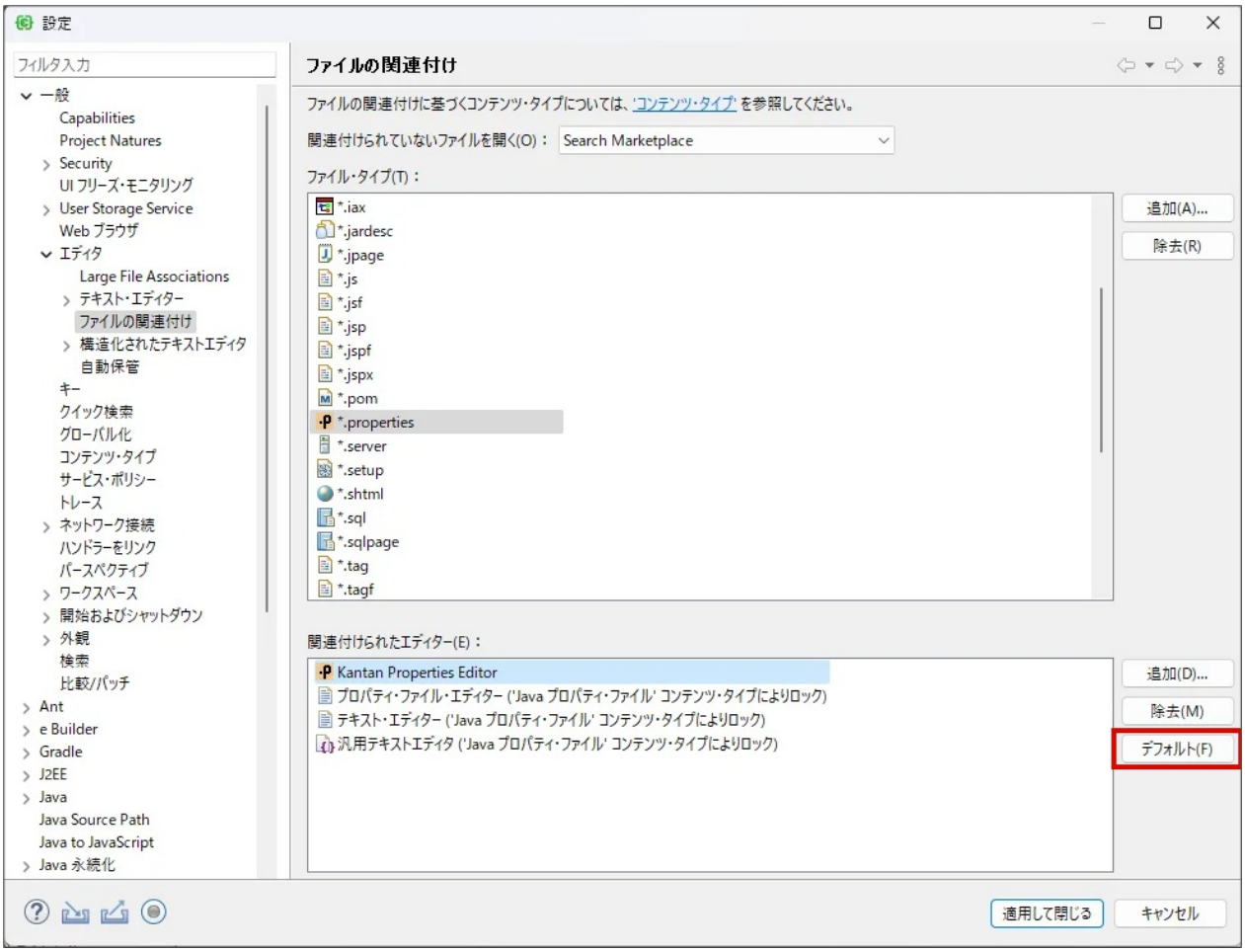
初期設定ではプロパティファイルと関連付けられていないため、下記設定を行ってください。

説明

- 以下の設定手順にてプロパティファイルと「Kantan Properties Editor」の関連付けを行います。
  1. メニュー・バーの「ウィンドウ」-「設定」を選択する。



  2. 「一般」-「エディタ」-「ファイルの関連付け」を選択する。
  3. ファイル・タイプの中から「*.properties」を選択し、「関連付けられたエディター」の中から「Kantan Properties Editor」を選んで「デフォルト」ボタンを押下する。



  4. 「適用して閉じる」ボタンを押下する。

ライセンス登録

項目

- e Builder のライセンスについて
- メニュー・バーからのライセンス登録方法

e Builder のライセンスについて

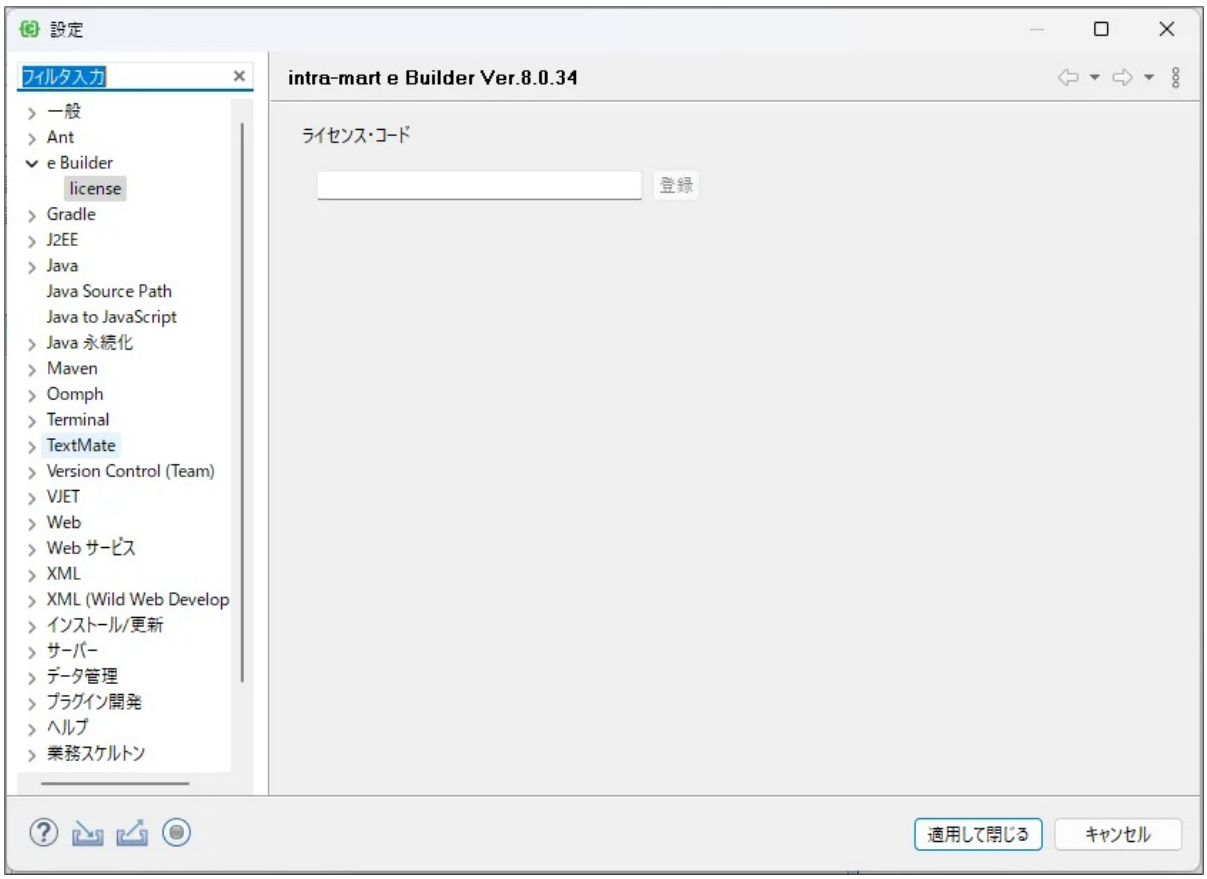
e Builder のライセンスには 2 種類のライセンス（製品版、60 日評価版）があります。

e Builder のライセンスが切れている場合、e Builder で提供されているすべての機能が利用できなくなります。
e Builder のライセンス登録は、起動時に表示されるウィザードからの登録とメニュー・バーからの登録の 2 通りがあります。
起動時にライセンス登録を行っていない場合、下記方法にてライセンスの登録を行ってください。

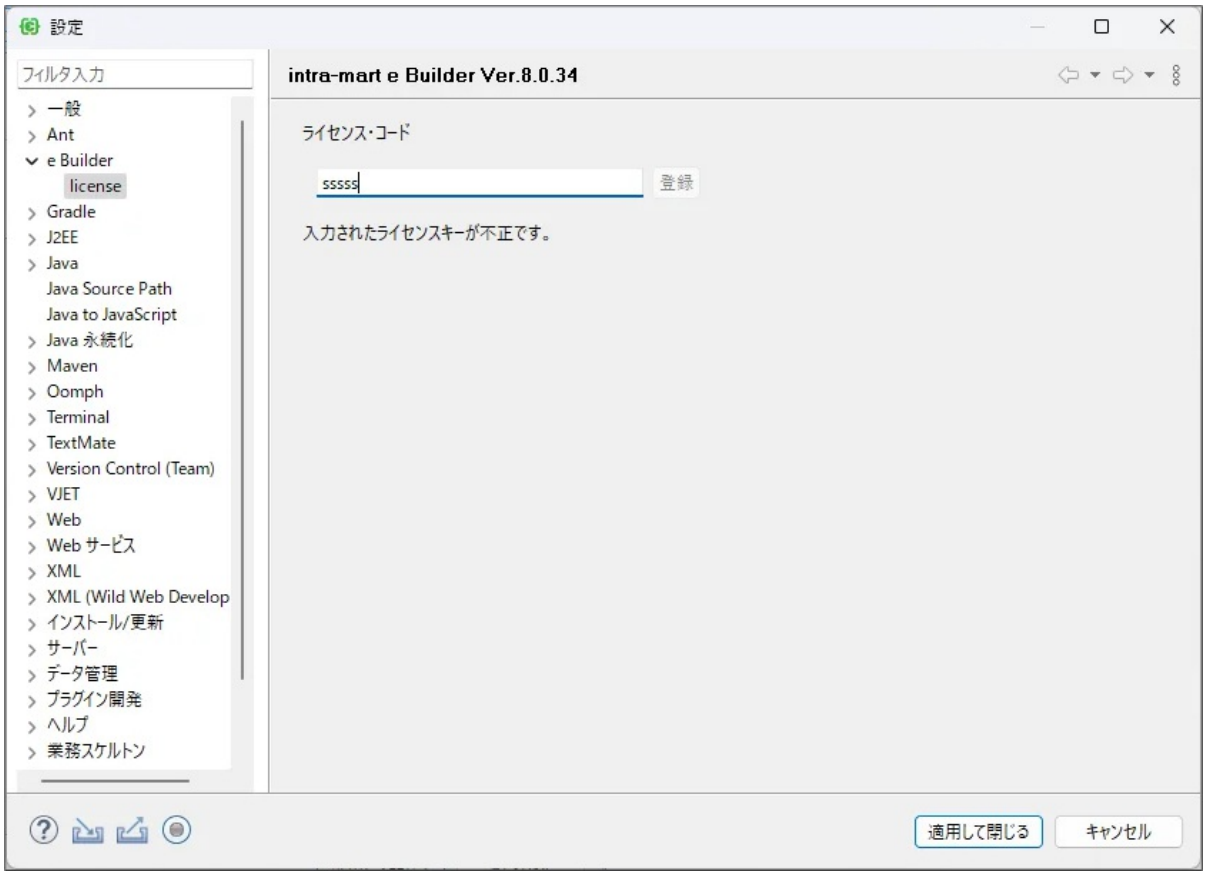
メニュー・バーからのライセンス登録方法

- 初回起動時に評価版ライセンスを選択した場合、または製品版ライセンスの更新を行う場合、
  以下の方法にてライセンスの登録を行います。
  ライセンス登録ウィザードを表示します。表示方法は以下の通りです。

  メニュー・バー [ウインドウ]-[設定] を開き、メニュー [e Builder]-[license] を開きます。



- ライセンス・コードの入力欄にライセンスを入力します。



- 入力されたライセンスが正しい場合「登録」ボタンが有効に設定されます。「登録」ボタンを押下して、ライセンスの登録を行ってください。

デバッグサーバの構築

項目

- 概要
- 構築手順
  - データベースのセットアップ
  - war ファイルの作成 （intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成）
  - Apache Cassandra のセットアップ（IMBox を利用する場合）
  - Resin（Windows版）のセットアップ
  - e Builder にデバッグサーバを登録
  - デバッグサーバの起動
  - war ファイルのデプロイ
  - デバッグサーバのテナント環境の構築
- 参考
  - [参考] デバッグサーバの起動・停止
  - [参考] Cassandra サーバの実行・停止

概要

- 本項では、デバッグサーバの構築方法について説明します。
  デバッグサーバとは、e Builder から起動可能な「intra-mart Accel Platform」専用の開発環境用サーバです。

> **コラム**
>
> デバッグサーバ機能には以下の注意事項、および利用制限があります。
> 1. デバッグサーバライセンスは開発用途でご利用ください。運用用途にはご利用できません。
> 2. デバッグサーバとして利用できる Web アプリケーションサーバは Resin 4.0 のみです。
> 3. 「intra-mart Accel Platform」を購入している場合、「intra-mart Accel Platform」に同梱されている Resin Pro をご利用できます。
> 4. サーバ構成はスタンドアローン構成のみです。分散構成は構築できません。
> 5. intra-mart Accel Applications およびその他の Extensions 製品の開発環境での利用については別途ライセンスが必要です。

構築手順

- セットアップ手順は、intra-mart Accel Platform の設定手順と同様です。
  ここでは、開発環境用の Web アプリケーションサーバの Resin をローカル環境にセットアップし、テナント環境の構築まで行う手順について説明します。
  1. データベースのセットアップ
  2. war ファイルの作成（intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成）
  3. Apache Cassandra の設定（IMBox を利用する場合）
  4. Resin（Windows版） のセットアップ
  5. デバッグサーバを e Builder に登録
  6. Apache Cassandra の起動（IMBox を利用する場合）
  7. デバッグサーバの起動
  8. warファイルのデプロイ
  9. デバッグサーバのテナント環境の構築

データベースのセットアップ

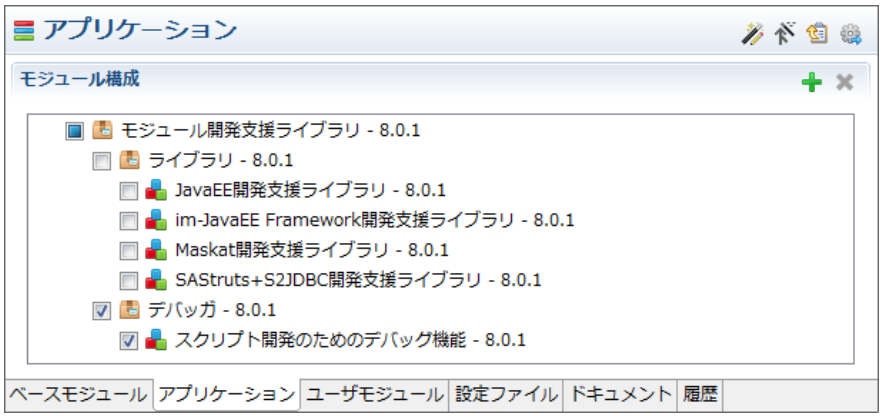
開発用に使用するデータベースをセットアップしてください。
セットアップの方法は、「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の「データベース」を参照してください。

> **コラム**
>
> プログラム開発プロジェクトに関わる開発者が複数名いる場合は、同一のデータベースを利用することはできても、同一スキーマでは開発することはできません。
> 必ず開発者毎、環境毎にスキーマを分けてください。

war ファイルの作成 （intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成）

開発環境用に利用する war ファイルを作成してください。
war ファイルの作成方法に関しては「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の「WARファイルの作成」を参照してください。
また、開発環境用に war ファイルを作成する際には以下を参考にしてください。

- スクリプト開発においてデバッグ機能を利用したい場合は、アプリケーションで「モジュール開発支援ライブラリ」を追加し、「デバッガ」を選択してください。
  （下記イメージはモジュール開発支援ライブラリの 8.0.1 を設定した場合です）

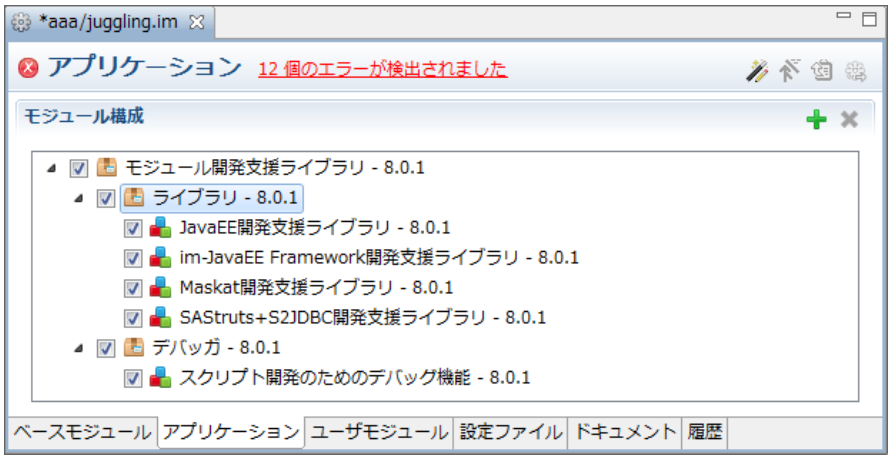


- SAStruts + S2JDBC 開発において Seasar2 の HOT deploy 機能を利用したい場合は、IM-Juggling ビルドウィザードの実行環境で「結合テスト環境」を選択してください。
  「結合テスト環境」を選択した場合、intra-mart Accel Platform 2013 Summer(Damask) では下記設定で出力されます。
  - env.txt : ct
  - s2container.dicon : hotdeploy.dicon を include

> **コラム**
>
> IM-Juggling ビルドウィザードの実行環境の各選択値に対して、env.txt は以下のように出力され、標準の s2container.dicon ではそれぞれ下記のように deploy モードが設定されます。
>
> - [単体テスト環境] : ut → WARM deploy
> - [結合テスト環境] : ct → HOT deploy
> - [統合テスト環境] : it → COOL deploy
> - [運用環境] : production → COOL deploy

> **注意**
>
> SAStruts Framework を含めて、「結合テスト環境」で war を作成した場合、複数のリクエストを同時に処理できなくなります。

- intra-mart WebPlatform Ver.7.2 に同梱されていた im_eb_component.jar を利用していた場合、「ライブラリ」にチェックを入れてください。
  また、モジュール開発支援ライブラリを設定する際、一部のモジュールには必須となるベースモジュールがあります。
  その設定が欠落していた場合は IM-Juggling 上でエラーメッセージを表示し、そのベースモジュールが必要となるかを表示します。
  この指示に従い、ベースモジュールを設定してください。
  （下記イメージはモジュール開発支援ライブラリの 8.0.1 を設定した場合です）



> **コラム**
>
> プログラム開発プロジェクトに関わる開発者が複数名いる場合は、開発環境の構成を統一するために、作成した war ファイルを共有するとよいです。

Apache Cassandra のセットアップ（IMBox を利用する場合）

intra-mart Accel Platform の構成に IMBox を含めている場合、ローカル環境に Apache Cassandra をセットアップしてください。
セットアップの方法は、「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の 「Apache Cassandra」を参照してください。

> **コラム**
>
> プログラム開発プロジェクトに関わる開発者が複数名いる場合は、必ず開発者毎、環境毎に Apache Cassandra をセットアップしてください。

Resin（Windows版）のセットアップ

ローカル環境に Resin（Windows版）をセットアップしてください。
セットアップの方法は、「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の 「Resin（Windows版）のインストール」を参照してください。

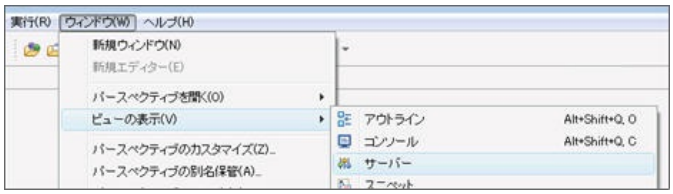
> **コラム**
>
> Resin（Windows版）は、intra-mart Accel Platform に同梱されています。

e Builder にデバッグサーバを登録

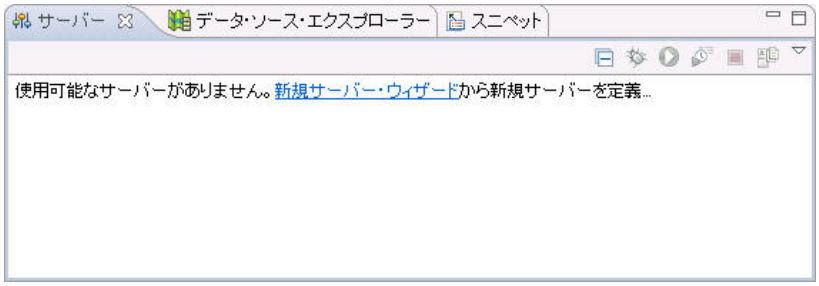
e Builder を起動し、開発環境用のデバッグサーバを e Builder に登録してください。

> **注意**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2012 Winter から intra-mart e Builder for Accel Platform 2013 Spring 以降にアップデートした場合、
> Resin サーバの設定を削除し、デバッグサーバを登録・利用するようにしてください。

- Eclipse のツール・バーから「ウィンドウ」→「ビュー」で「サーバ」を選択し、表示します。

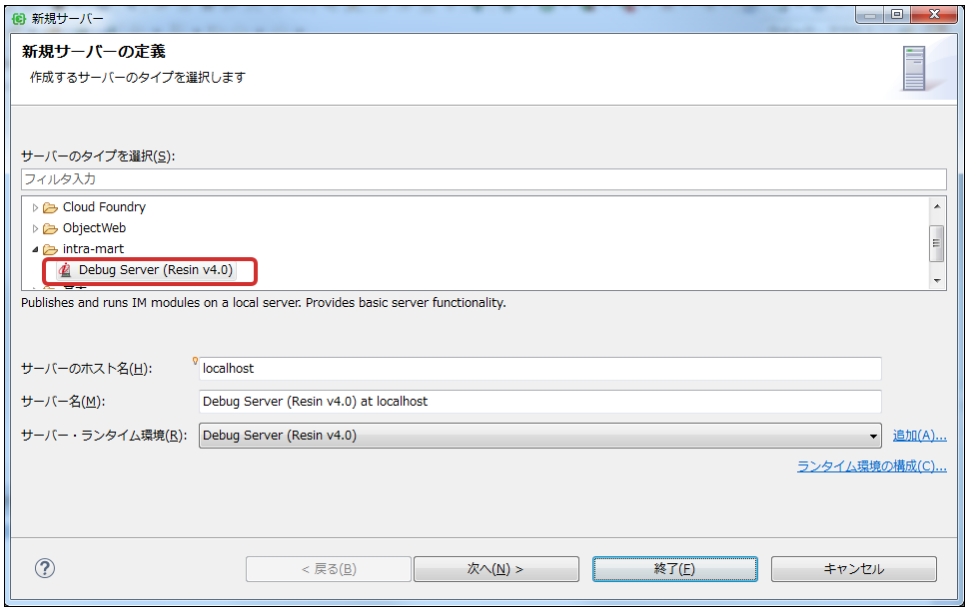


- 「サーバ」ビューから「新規サーバ・ウィザード」を表示します。

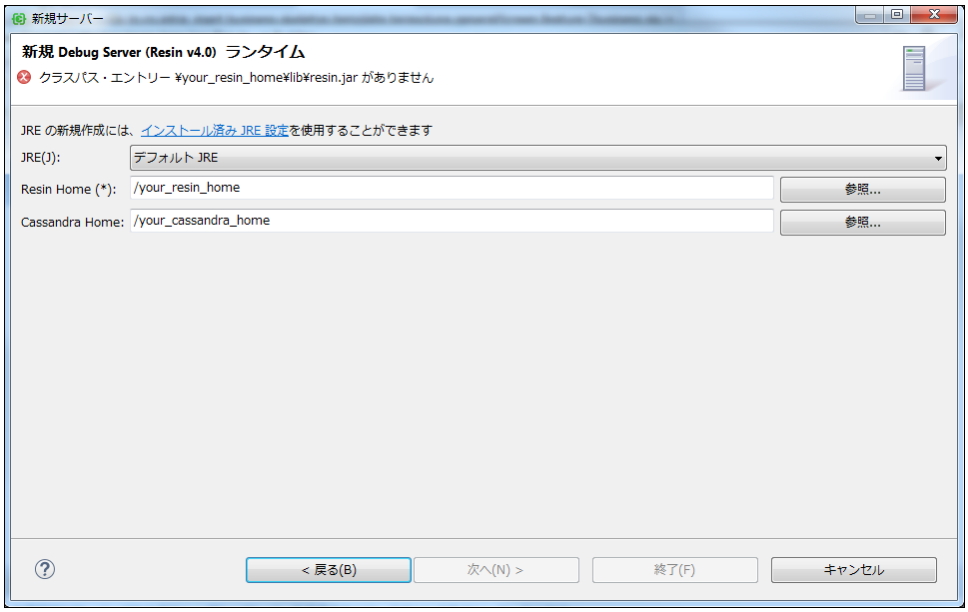


> **コラム**
>
> 上記イメージは、サーバが何も設定されていない状態のイメージです。
> あらかじめ別のサーバを設定している方は、ビューから右クリックで「新規」を選択してください。

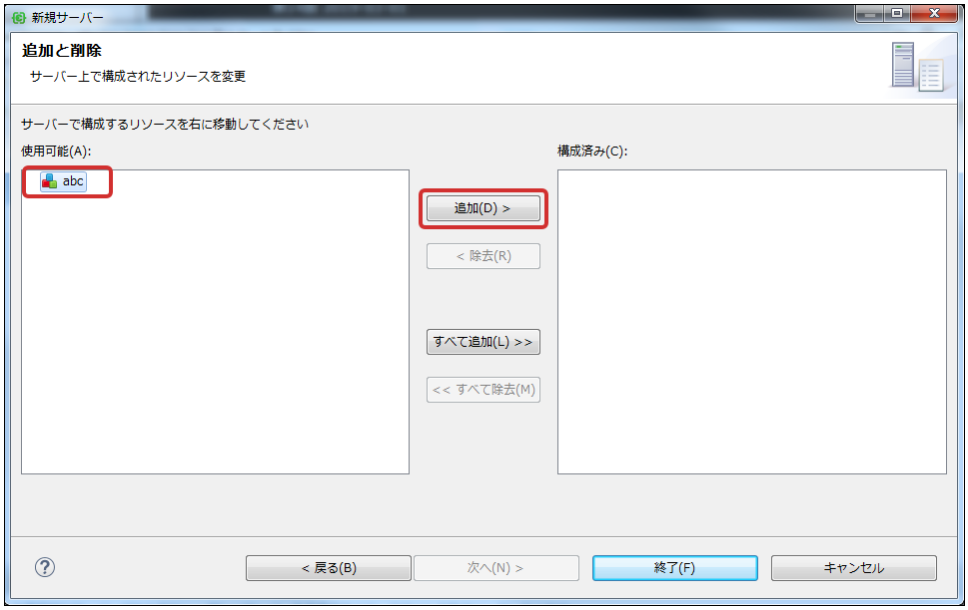
- 「新規サーバ・ウィザード」から「intra-mart」→「Debug Server(Resin4.0)」を選択します。
- サーバを起動する場合、Java は JDK を利用するように設定してください。
- サーバ名の設定は、英数字のみを利用するようにしてください。



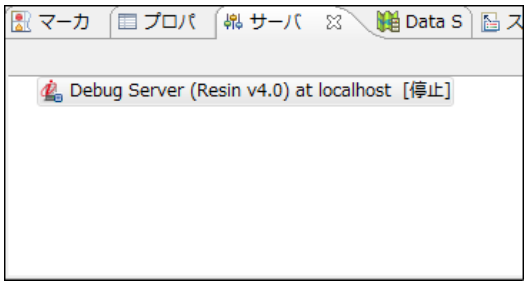
- Resin Home に Resin サーバのインストールディレクトリを指定します。
  Cassandra を使用する場合は Cassandra Home に Cassandra のインストールディレクトリを指定し、次へボタンを押下します。



- 既にモジュールプロジェクトがある場合、デバッグサーバとの関連付けを行います。
  モジュールプロジェクトがない場合はそのまま終了ボタンを押下します。

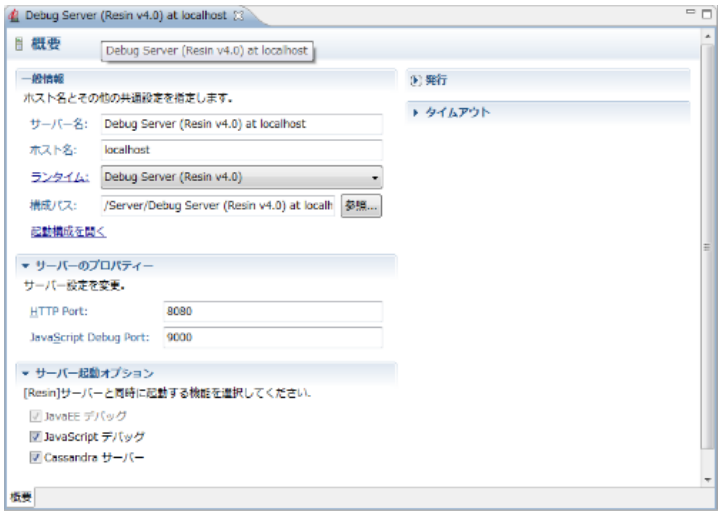


- 「終了」ボタンを押下すると「サーバ」ビュー上に設定した デバッグサーバ の情報が表示されます。



- 「サーバ」ビューで Debug Server の概要を開きます。
  必要に応じて以下の設定を変更してください。
  - 一般情報
    - サーバ名：このサーバ設定の名前を設定します。
    - ホスト名：サーバ起動時に利用するホスト名を指名します
    - ランタイム：この設定の実行時に起動させるサーバを設定します。
    - 構成パス：このサーバを起動する際の構成を設定します。
    - 起動構成を開く：起動構成に関する細かい設定を行います。具体的にはサーバ実行時の VM 引数や、実行時に設定するクラスパスなどを設定できます。
  - サーバのプロパティ
    - HTTP Port - デバッグサーバの HTTP ポートを設定します。
    - JavaScript Debug Port - スクリプト開発モデル用のデバッグポートを設定します。
  - サーバの起動オプション

- Java EE デバッグ - デバッグ起動時 Java ソースのブレークポイントを使用可能にします。
- JavaScript デバッグ - デバッグ起動時ファンクションコンテナのブレークポイントを使用可能にします。
- Cassandra サーバ - デバッグサーバ起動時に Cassandra サーバを起動します。

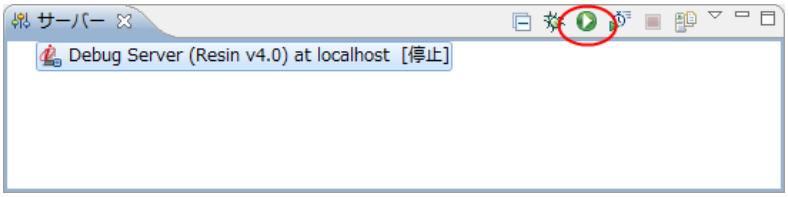


> **コラム**
>
> サーバ実行時メモリ領域やヒープ領域の設定は、「起動構成を開く」の「引数」タブで設定された情報が最優先です。
> 引数の設定は、上記の「引数」タブの VM 引数のテキストエリア内で記述されています。
> 初期値は以下の用に設定されていますが、OutOfMemory が発生する場合は以下の値を変更して調整を行ってください。
>
> 初期値： -Xmx4096m -Xms4096m -server

> **コラム**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2023 Autumn より、「引数」タブの VM 引数のテキストエリア内に引数が追加されています。
> JDK 8 および 11 を設定して利用する場合、以下の引数を削除してください。
>
> -add-opens=java.base/java.util=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/java.lang=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/sun.util.locale=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.xml/com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/sun.util.calendar=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.xml/com.sun.org.apache.xerces.internal.jaxp.datatype=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/java.text=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.desktop/java.awt.font=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/java.math=ALL-UNNAMED
> -add-opens=java.base/java.util.concurrent=ALL-UNNAMED

デバッグサーバの起動

「サーバ」ビューで、「サーバを実行」ボタンを押下すると、デバッグサーバが起動します。



> **コラム**
>
> デバッグサーバの起動に利用する JRE は、デバッグサーバの設定画面の [一般情報]-[ランタイム] より設定できます。

> **コラム**
>
> IMBox を利用する場合、Apache Cassandra も起動してください。
> デバッグサーバのサーバ起動オプションで「Cassandra サーバ」を選択することで、デバッグサーバ起動時に Apache Cassandra が停止している場合は起動します。

> **注意**
>
> e Builder のライセンスが失効している場合、デバッグサーバの起動ができません。
> e Builder のライセンスについては「*ライセンス登録*」を参照してください。

war ファイルのデプロイ

デバッグサーバに war ファイルをデプロイしてください。
デプロイの方法は、「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の 「WARファイルのデプロイ」を参照してください。

> **コラム**
>
> war ファイルのアンデプロイについては「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の「WARファイルのアンデプロイ」を参考にしてください。

デバッグサーバのテナント環境の構築

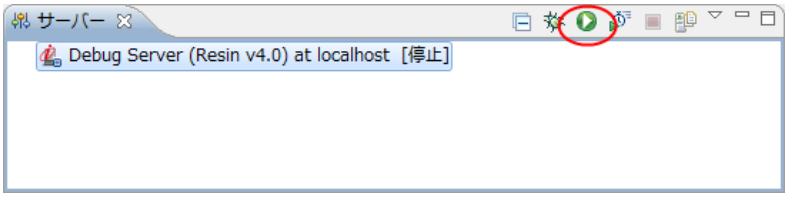
デバッグサーバの起動後、テナント環境の構築を行ってください。
構築の方法は、「intra-mart Accel Platform セットアップガイド」の「テナント環境セットアップ」を参照してください。

> **注意**
>
> デバッグサーバ環境におけるライセンスの登録では、intra-mart Accel Platform のライセンスキーを登録する必要はございません。
> デバッグサーバライセンスは、アプリケーションの開発を目的に、intra-mart Accel Platform のすべての機能を利用できます。
> ただし、デバッグサーバ環境で intra-mart Accel Applications を利用する場合はその製品毎のライセンスを登録する必要があります。

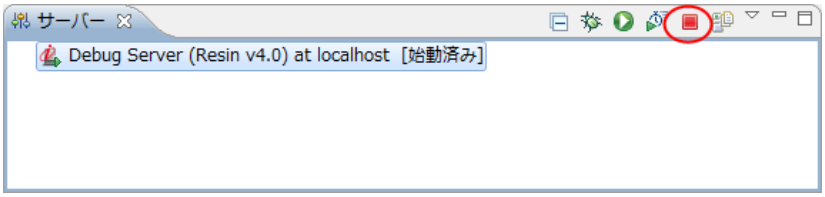
参考

[参考] デバッグサーバの起動・停止

「サーバ」ビューで、「サーバを実行」ボタンを押下すると、デバッグサーバが起動します。



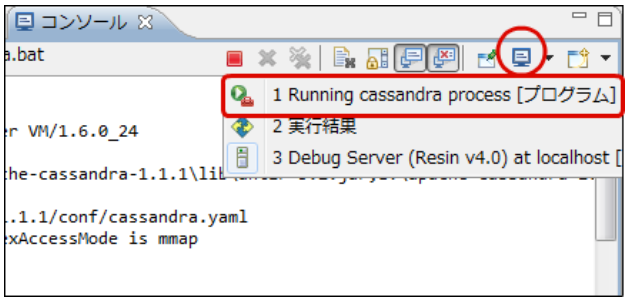
「サーバ」ビューで、「サーバを停止」ボタンを押下すると、デバッグサーバが停止します。



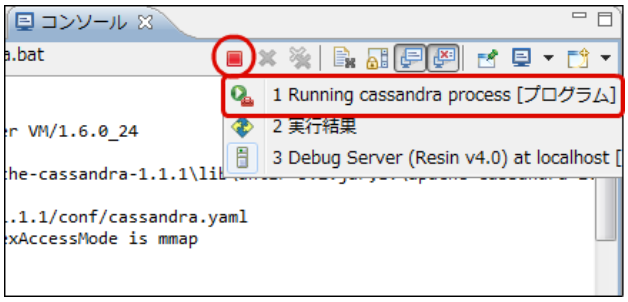
> **注意**
>
> e Builder のライセンスが失効している場合、デバッグサーバの起動ができません。
> e Builder のライセンスについては「*ライセンス登録*」を参照してください。

[参考] Cassandra サーバの実行・停止

- デバッグサーバのサーバ起動オプションで「Cassandra サーバ」を選択しているとき、
  Cassandra サーバはデバッグサーバ起動時に同期的に起動します。
  起動時のログは「コンソール」ビューから「選択されたコンソールの表示」→「Running cassandra process」を選択し、
  コンソールを切り替えることで確認できます。



- Cassandra サーバを停止するときは同様に
  「選択されたコンソールの表示」→「Running cassandra process」を選択して
  コンソールをCassandraサーバに切り替えた上で「終了」ボタンを押下します。



e Builder のアップデート

項目

- 概要
- バージョンの確認方法
  - e Builder 本体の現在のバージョンの確認方法
  - 業務スケルトンの現在のバージョンの確認方法
  - 初期インストール時の e Builder 本体のバージョンの確認方法
- 更新サイトからアップデート
- アーカイブからアップデート
- [補足] JDKの設定について
- [補足] 最新版の e Builder にアップデート後、以前のバージョンのワークスペースをそのまま利用する場合の注意点

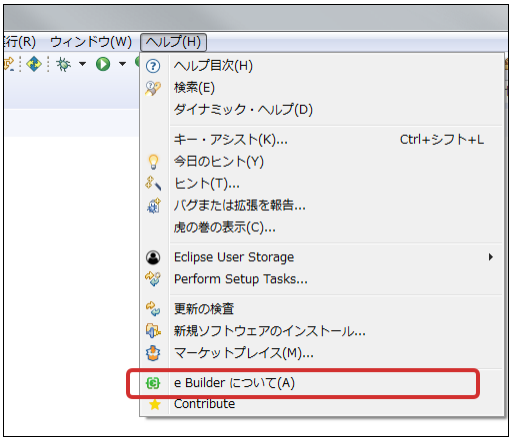
概要

- 本項では e Builder の更新手順を説明します。

バージョンの確認方法

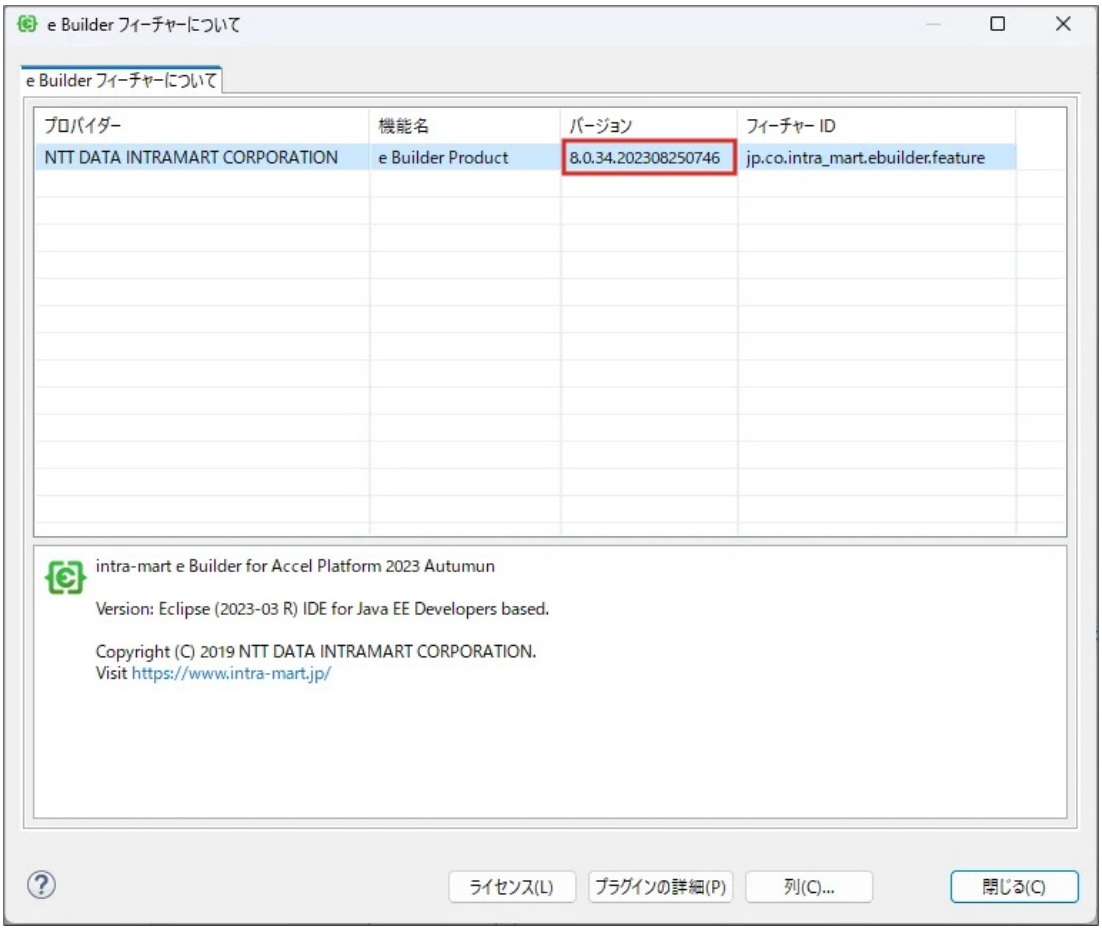
e Builder 本体の現在のバージョンの確認方法

- Eclipse のツールバーより、「ヘルプ」→「e Builder について」を選択します。



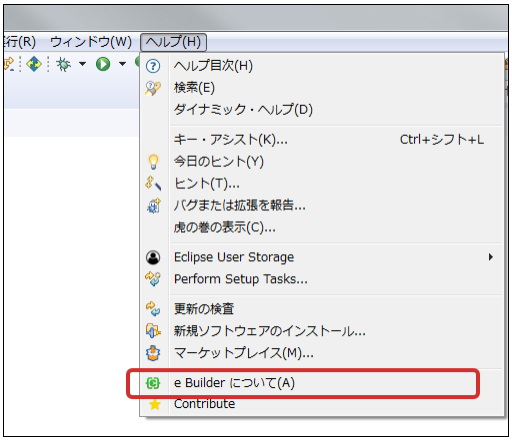
- e Builder のアイコンを選択します。

- 一覧より「バージョン」列を確認します。
  （下イメージは e Builder のバージョンが 2023 Autumn (8.0.34) の例）



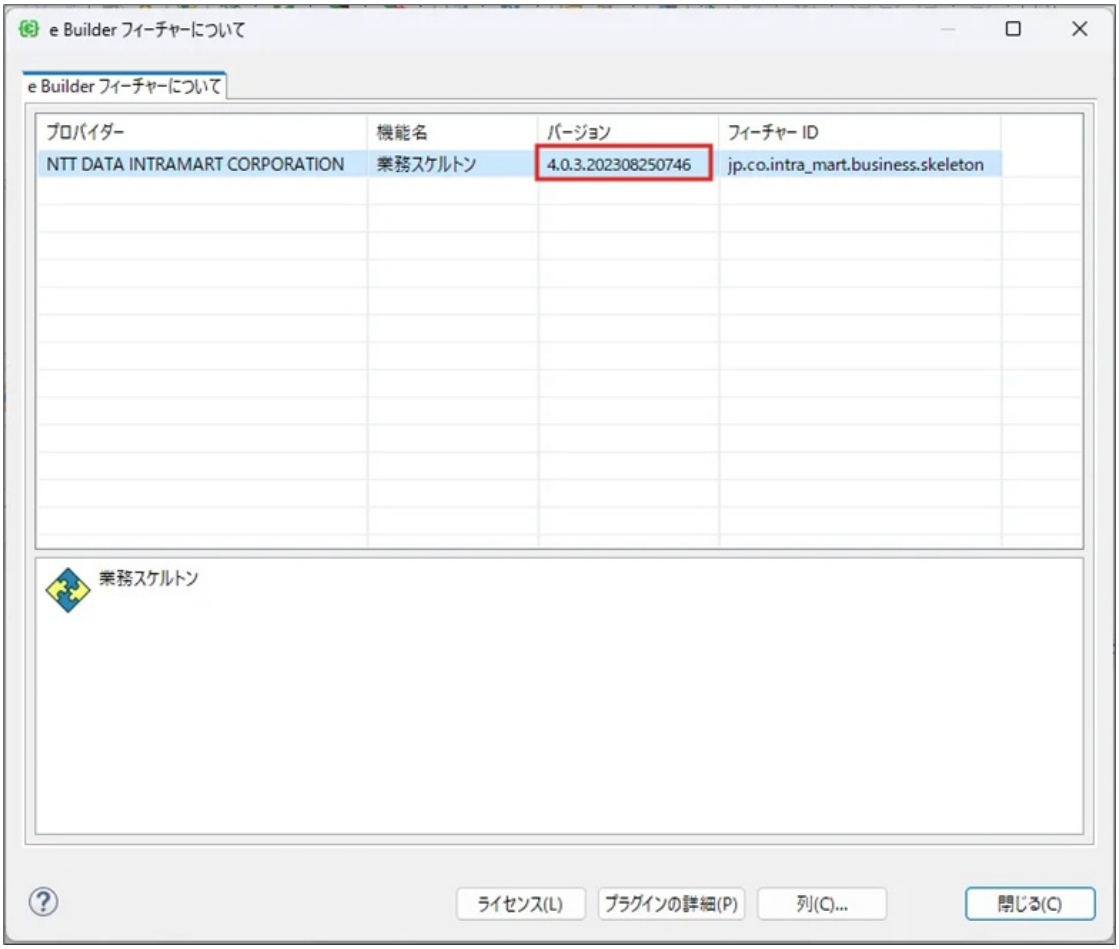
業務スケルトンの現在のバージョンの確認方法

- Eclipseのツールバーより、「ヘルプ」→「e Builder について」を選択します。



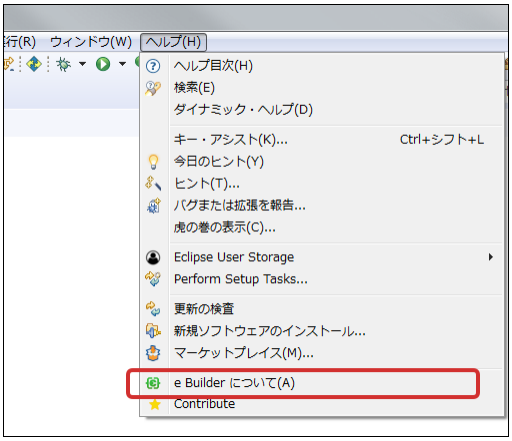
- 業務スケルトンのアイコンを選択します。

- 一覧より「バージョン」列を確認します。
  （下イメージは業務スケルトンのバージョンが 4.0.3 の例）



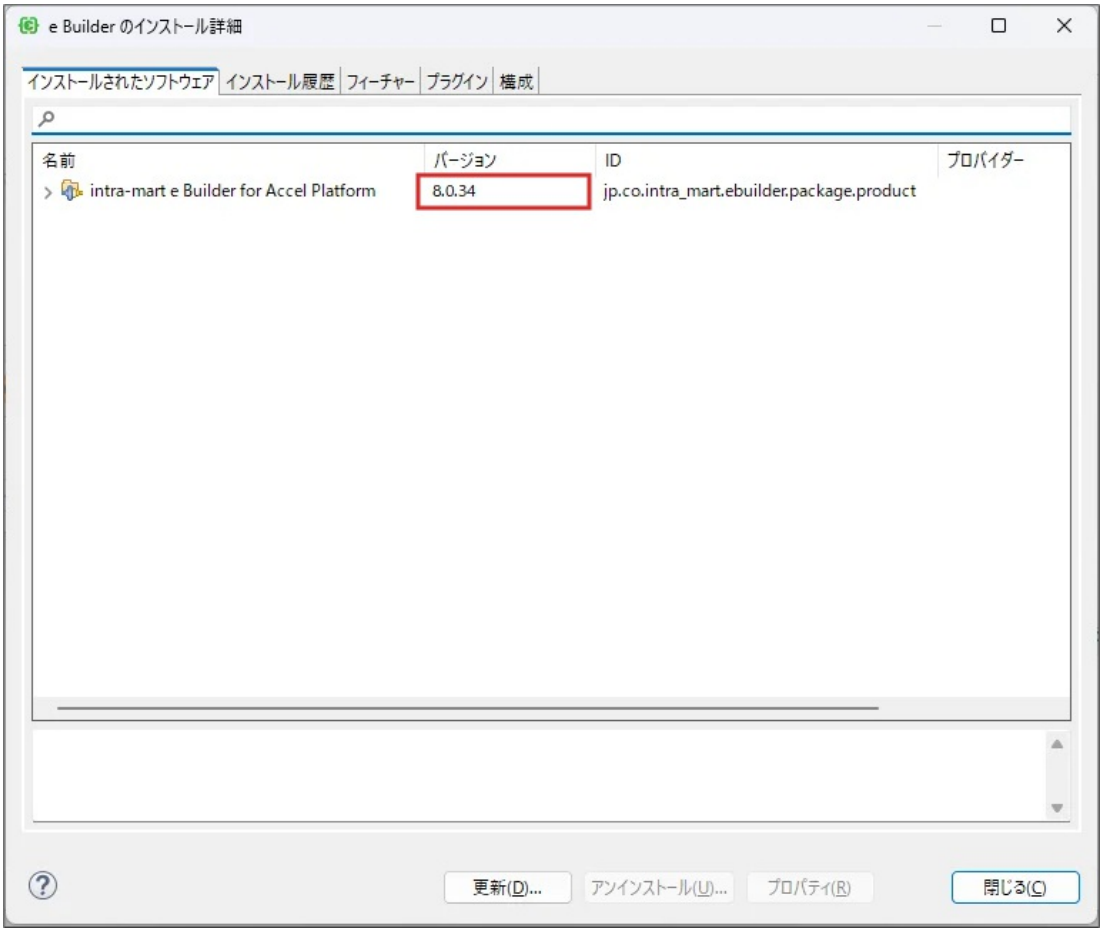
初期インストール時の e Builder 本体のバージョンの確認方法

- Eclipse のツールバーより、「ヘルプ」→「e Builder について」を選択します。



- 「インストール詳細」ボタンを選択します。

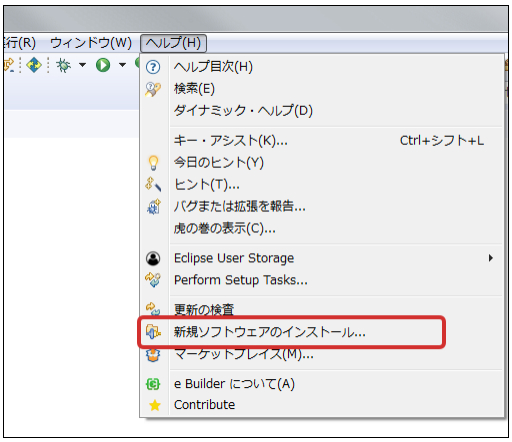
- 「インストールされたソフトウェア」タブを参照し、一覧より
  「intra-mart e Builder for Accel Platform」行の「バージョン」列を確認します。
  （下イメージは e Builder のバージョンが 2023 Autumn (8.0.34) の例）



更新サイトからアップデート

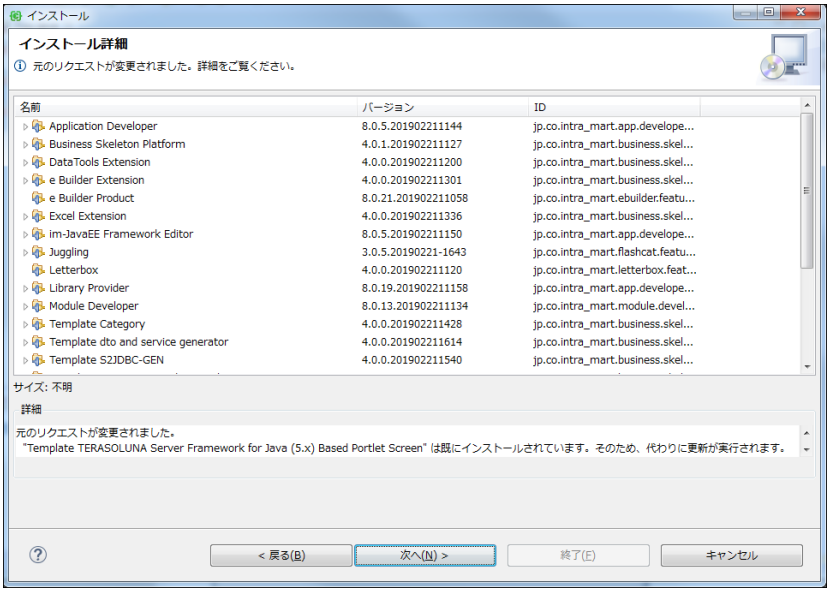
> **注意**
>
> intra-mart e Builder for Accel Platform のアップデートにおいて、 2023 Spring (8.0.33) 以前のバージョンから、
> 2023 Autumn (8.0.34) 以降へのアップデートは、使用している Eclipse のバージョンが異なるため、本項によるアップデート手順は利用できません。
> 2023 Autumn (8.0.34) をご利用になる場合は、新規インストールを実行してください。

- Eclipseのツールバーより、「ヘルプ」→「新規ソフトウェアのインストール」を選択します。

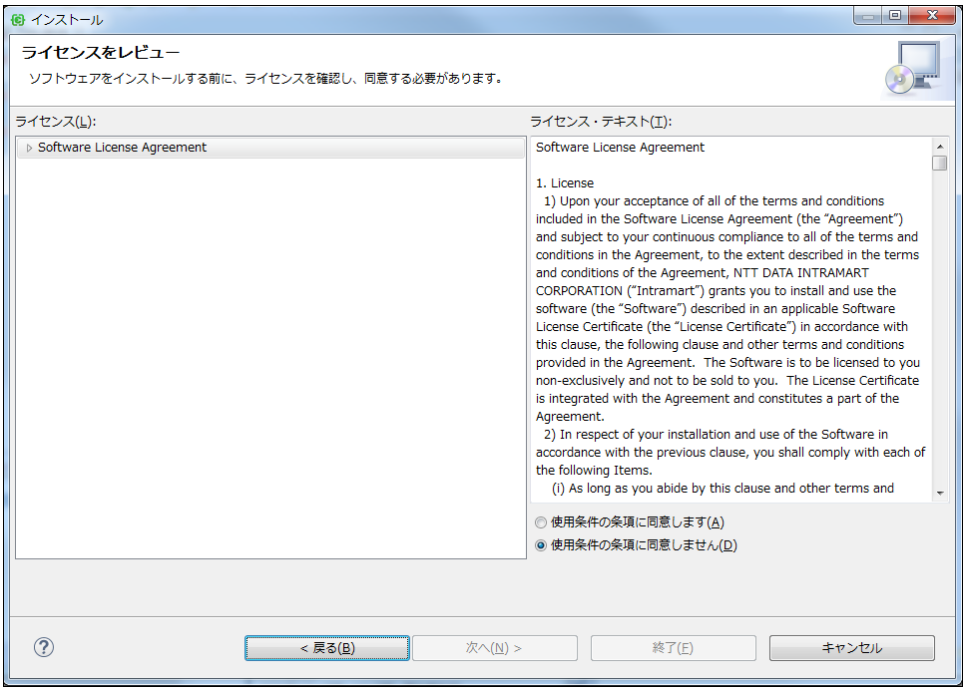


- 「作業対象」欄のテキストボックスに以下のURLを入力します。
  https://eclipse.intra-mart.jp/update/site/eBuilder/8.0.x/ (2023 Autumn (8.0.34) 以降のみ利用可能)

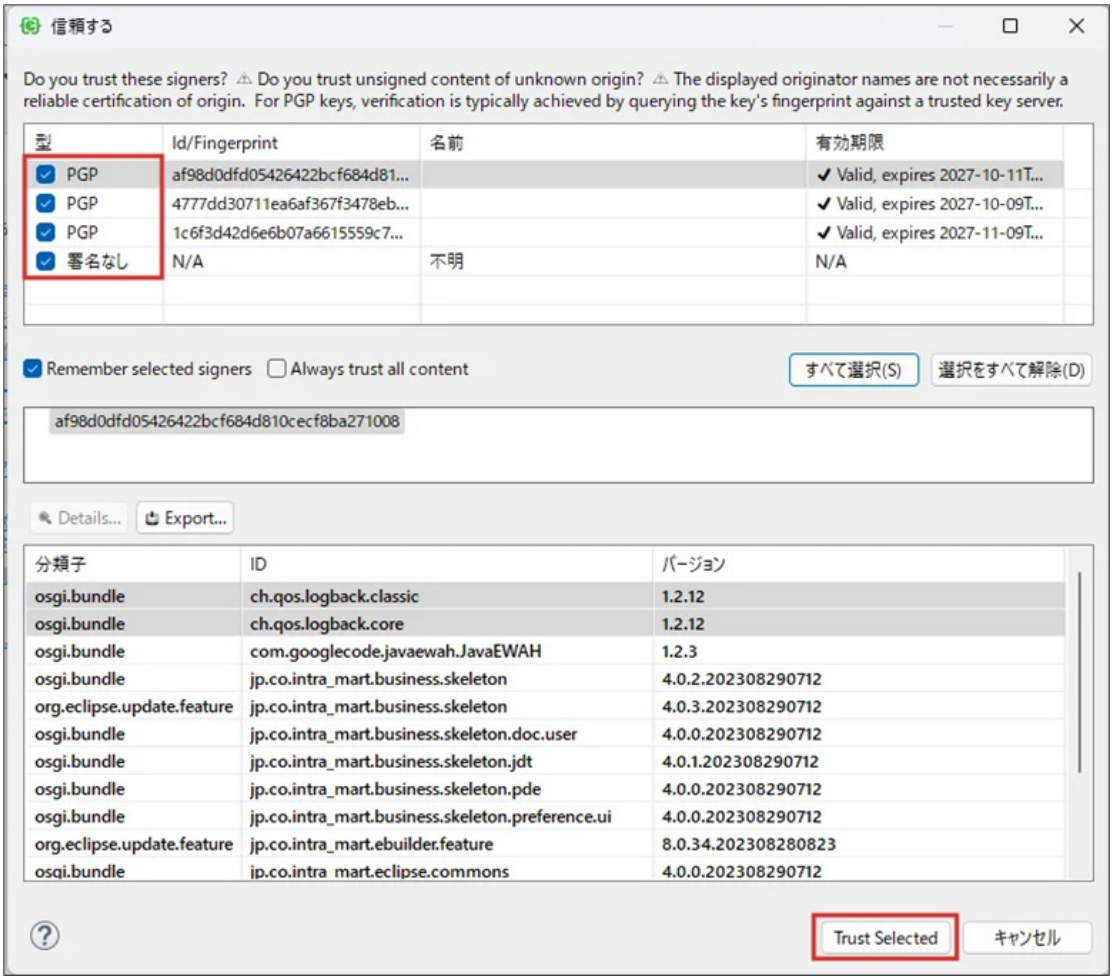
- インストール可能なフィーチャー一覧が表示されますので
  「e Builder」および「Business Skeleton」を選択して次へ進んでください。
- インストール詳細が表示されます。
  そのまま次へ進みます。



- 「ライセンス確認」画面が表示されます。
  「使用条件の条項に同意します」をチェックし「終了」ボタンを押下するとインストールが実行されます。



- インストールが実行されると、インストール対象を信頼するかどうかを確認するダイアログが表示されますので、チェックボックスをクリックして「Trust Selected」ボタンを押下します。



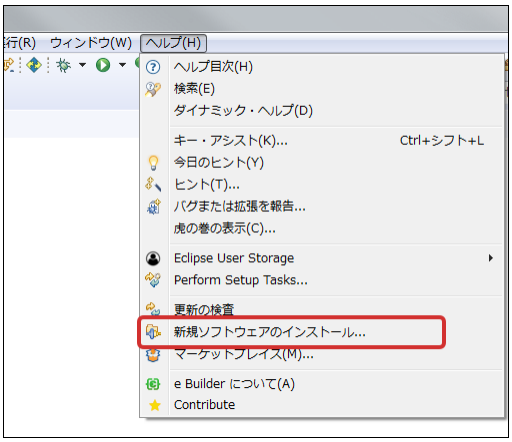
- 再起動を求められるので、[すぐに再起動]ボタンを押下します。

アーカイブからアップデート

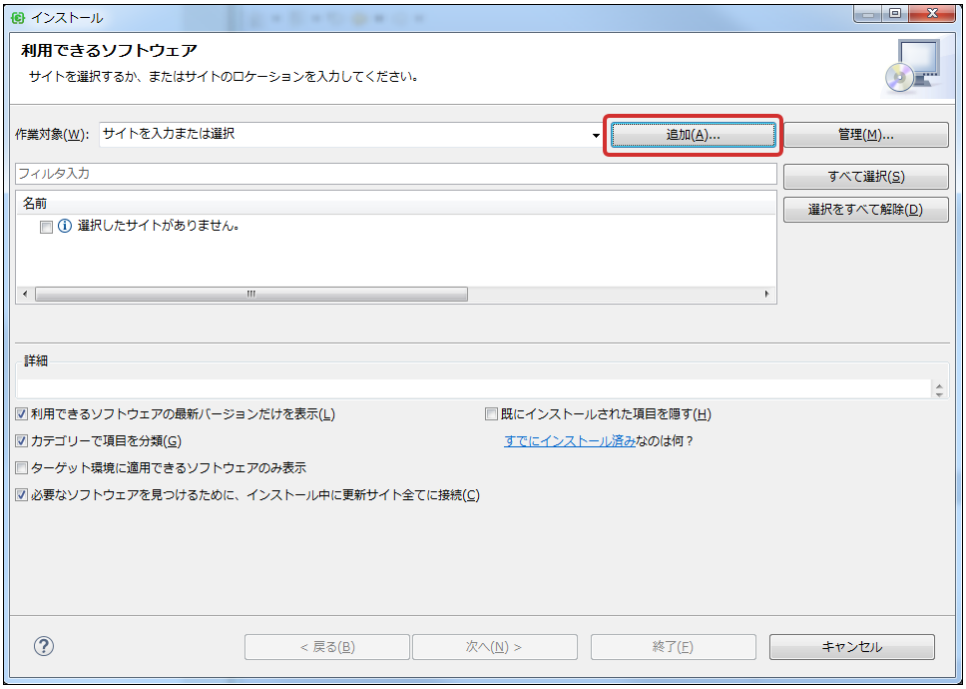
コラム

2019年2月現在、e Builder のアップデートが可能なバージョンは 2012 Winter (8.0.2) から 2015 Spring (8.0.10) をご利用のお客様は 2015 Summer (8.0.11) へのバージョンアップができます。
また、2015 Winter (8.0.12) から 2016 Spring (8.0.13) をご利用のお客様は 2016 Summer (8.0.14) へのバージョンアップができます。
2016 Winter (8.0.15) から 2018 Spring (8.0.19) をご利用のお客様は 2018 Summer (8.0.20) へのバージョンアップができます。
2018 Winter (8.0.21) から 2022 Winter (8.0.32) をご利用のお客様は 2023 Spring (8.0.33) へのバージョンアップができます。
アーカイブの取得は、「プロダクトファイルダウンロード」から行ってください。

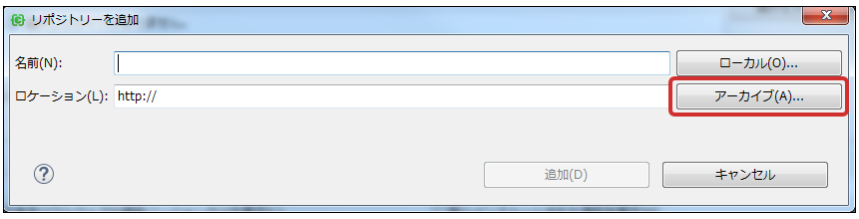
- Eclipse のツールバーより、「ヘルプ」→「新規ソフトウェアのインストール」を選択します。



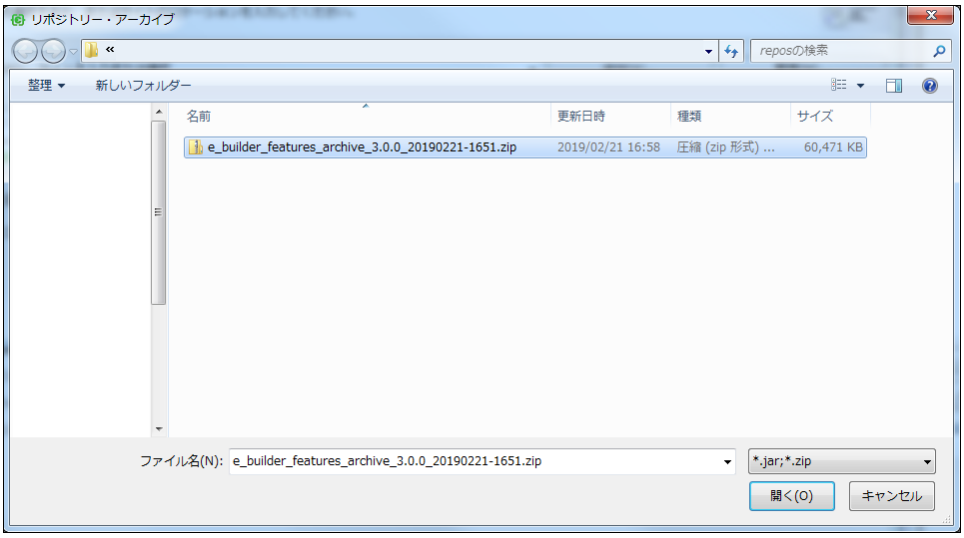
- 「作業対象」欄横の「追加」ボタンを押下します。



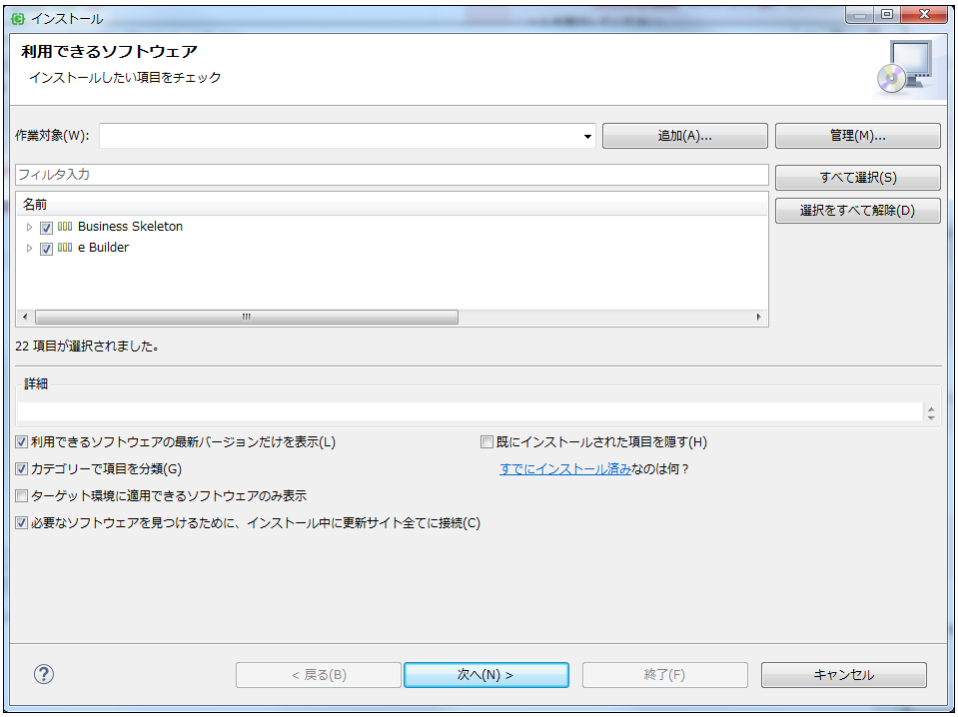
- 「アーカイブ」ボタンを押下します。



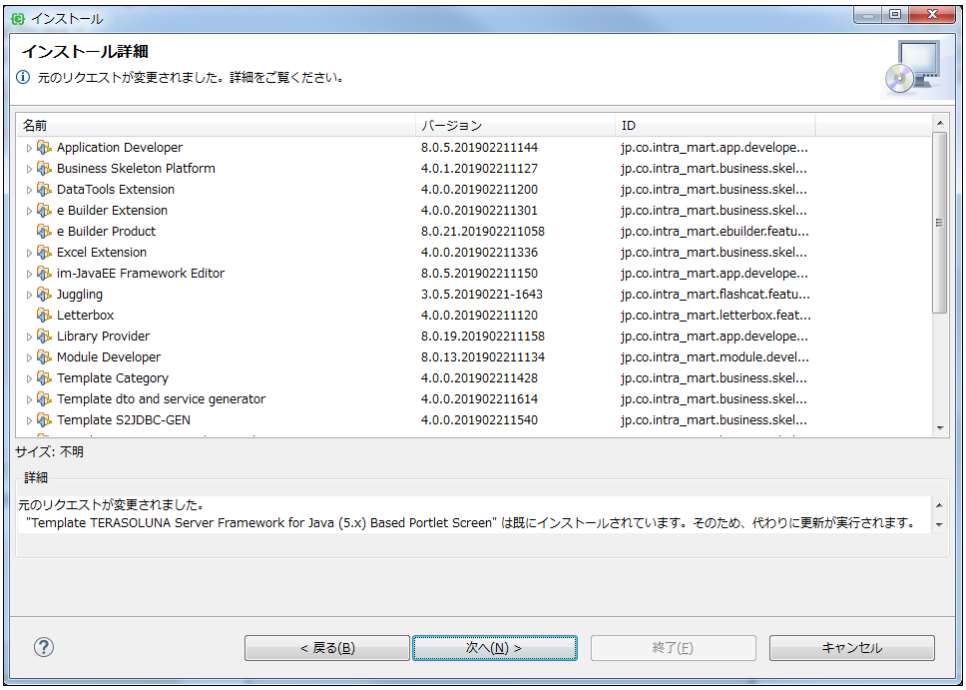
- 「ファイル選択」画面が表示されますので、対象のアーカイブファイルを選択します。



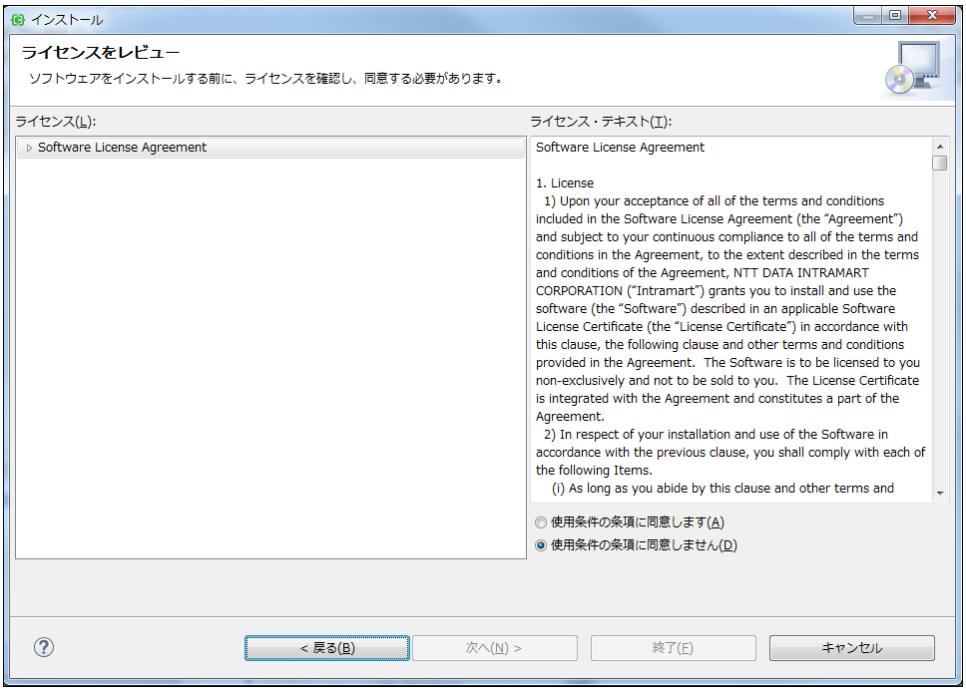
- インストール可能なフィーチャー一覧が表示されますので
  「e Builder」および「Business Skeleton」を選択して次へ進んでください。



- インストール詳細が表示されます。
  そのまま次へ進みます。



- 「ライセンス確認」画面が表示されます。
  「使用条件の条項に同意します」をチェックし「終了」ボタンを押下するとインストールが実行されます。



[補足] JDKの設定について

- intra-mart Accel Platform のシステム要件にあわせて、intra-mart e Builder for Accel Platform の開発に利用する JDK のバージョンをあわせる必要があります。
  Java 開発環境 (JDK) および Java 実行環境 (JRE) の設定 を参考に設定を行ってください。

[補足] 最新版の e Builder にアップデート後、以前のバージョンのワークスペースをそのまま利用する場合の注意点

- e Builder では常に intra-mart Accel Platform の最新版のスクリプト開発用 API に対応していますが、アップデート後そのままワークスペースを利用しようとすると、 Vjet エディタの補完候補に最新のAPIが表示されないことがございます。
  その場合、一度 e Builder を終了していただき、以下のフォルダを削除した後、再度起動してください。

  %利用しているワークスペースのパス%/.metadata/.plugins/org.eclipse.dltk.mod.core/WorkspaceJsLib

プロジェクトの変換

項目
- 概要
- コンバート

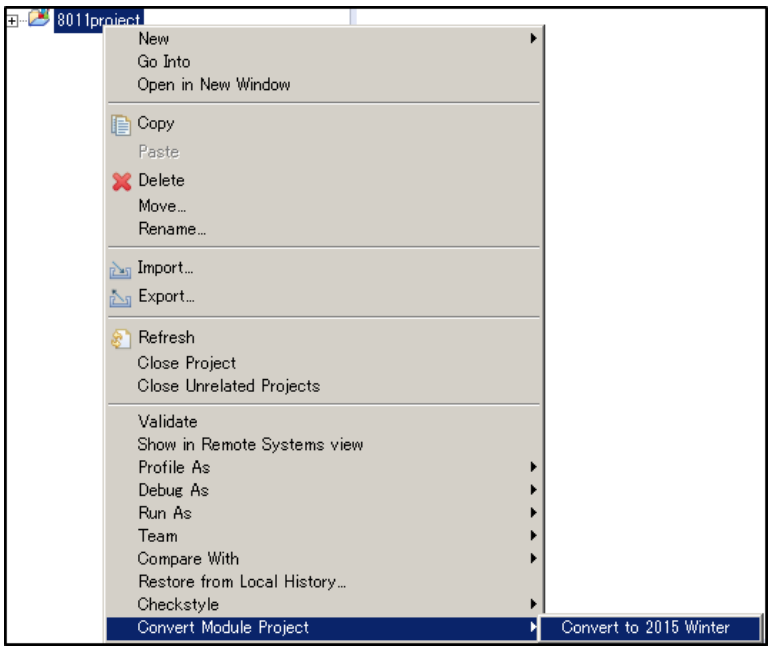
概要

- 本項では intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Winter (8.0.12) 以降で動作させるためのプロジェクトの変更方法について説明します。
  intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Winter (8.0.12) で Eclipse およびそれに付随するプラグインのバージョンアップを行いました。
  そのため、 intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Summer (8.0.11) 以前で作成されたモジュール・プロジェクトに対して、 intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Winter (8.0.12) 以降のバージョン向けにモジュールの設定をコンバートする機能を提供しています。

> **コラム**
>
> このコンバート機能は intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Summer (8.0.11) 以前で作成されたモジュール・プロジェクトが対象です。
> intra-mart e Builder for Accel Platform 2015 Winter (8.0.12) 以降で作成されたモジュール・プロジェクトや、他のプロジェクトでは利用できません。

コンバート

1. 事前準備として、コンバートを行うプロジェクトはワークスペース外などにバックアップを取るようにしてください。
   プロジェクトをコンバートする際は、パースペクティブのウィンドウ（パッケージ・エクスプローラー、プロジェクトエクスプローラー、ナビゲーター etc.）上に対象のプロジェクトが表示されている状態にしてください。
2. コンバートを実行したいプロジェクトを右クリックし、表示されたポップアップメニューから「Convert Module Project」 - 「Convert to 2015 Winter」を選択してください。



3. 実行したプロジェクトにおいて、以下の点が確認できればコンバートは完了です。
   - モジュール・プロジェクトに対して、ビルドパスを起因とするエラーマーカーが出ていないこと。
   - 再度、2. の操作を実行して「Convert Module Project」のメニューが表示されていないこと。

e Builder のアンインストール

項目
- 概要
- e Builder のアンインストール

概要

- 本項では e Builder のアンインストール手順を説明します

e Builder のアンインストール

- e Builder のアンインストールは、展開したフォルダを削除することによってアンインストールを実行します。
  生成したプロジェクトを保持しておきたい場合は、ワークスペース内のプロジェクトを退避させたうえでアンインストールを行ってください。